

■ロンドンからのたより（姉宛）■ ・1972-79



1972年7月25日

マコへ

懐かしいおたより、どうも有難う。この頃の私ってひどく気分が微妙なの。実際に日本は遥かに遠いのに、ふいと何かの折に実にありありとどういう脈絡もなしに、日本のあそこやらここやらと記憶の中に溜め込んだ風景の切れ端がまるで散乱してるみたいに頭を過ぎるわけ。日中でもほんとと白昼夢というのかしら、あれやこれやと無闇に心に浮かんできます。夜見る夢の中でも、いろんな昔の自分が、その‘日常’をごく当たり前の顔して暮らしているから、面白いともいえるし、それで結構慰められたりするのね。私が私に繋がっているわけだから。でも、どういう心的状況なのかしら、得てしてプツンと何かが切れてしまっている感じを抱くのですね。

「オペア aupair 留学」というのは、狙いは悪くはなかったとは思いますが。ホームステイということだから、英語に慣れ、英国の暮らしに慣れる上でこの時間稼ぎは‘渡りに船’というはずではあったけど。やはりね、つまりは他人の家に居候というわけだから厄介至極なの。お客さまというわけでもなし、ここジョリー家のお宅で家事や子どもの面倒やら、くだらない雑用に追われていて、もはやメイドというか、自分がまるで下層階級の人間の一人になったような気分なのです。あなたの場合、どんなに不本意な職場であろうとも、そこでともかくあなたは一人前扱いされてるはず。勉強したいことがまだまだいっぱいあるから、気儘に高級な書籍に囲まれて、でも必死に頭脳を揉み揉みしているでしょうから、それがとても羨ましいと思えてならない。つい此前までは私も

そんな感じで‘学生’の延長でしかない暮らしをしていたわけだから、今の自分にひどく違和感を覚えて、ひどく堪らないわけなの。

しかしながら、一見ここで無駄に日々が消耗されているかのようなではあっても、これ迄薄ぼんやりとしか理解できなかった「精神分析理論」を頭の中で頻りに反芻してるわけです。例の Identification[同一視理論]やらだけど。なぜそうした観点に私の関心が焦点付けられたのかということをもつと理解し始めています。その恰好の症例というわけでもないけど、実に身近なところで、ここのお宅のレベッカという女の子だけど、ちょっとヒステリータイプで恐ろしくお転婆で、気難しい子どもなのですが、何が彼女をそうさせるかということが、一緒に暮らしていると実によく解るのです。彼女、かなり混乱してますわけ。ここはパキスタン系とイタリア人のご夫婦ですので、これを英国の代表としては毛頭考えられませんが、他のオペアをしている友だちと会って、いろいろとホームステイ先のお互いの家庭の噂話をすると、日本人と違う意味でのこちらのイギリスの人々の生きる難しさ・苦しみなどが解ってくるのです。概してなんとも心がホッとしないう国柄なわけ。ナイーヴさなど淘汰されてしまう。鉄面皮というか、タフになる外ないというわけだわ。

さて、実はひょんなことでトレーニング・スクールについての情報をゲットしました。日本を去る前に問い合わせしてあったセント・ジョージ病院を尋ねたの。一応チャイルド・サイコセラピストの空席があるということであつただけど。とても応募する余裕など今の私にはないと観念して、お断りしてきたわけ。ご迷惑の掛けついでにあれこれ得難い情報を主任の Dr.Walk からいただいたということになります。【ハムステッド・クリニック】

と【タヴィストック・クリニック】ですが、印象としては前者は理論的、後者は実践的という感じがします。2つともひどく興味を覚えるわけですが、いずれも来年の秋に開講ですし、それ迄に自分がどういう気持ちに落ち着くかです。それ迄はどちらにも一応接触はしておこうと思ってます。

今年の秋頃には、どこかの病院で職を持ちたいと思ってますが、今のところ全然自信が今ひとつ湧きません。それと、たとえ運よくトレーニングを受ける trainee の許可を得たとしても、4年間の学費のことを考えると、気が遠くなります。本当に他の人たちはどうしているのか、そのうち情報を集めたいと思ってます。莫大な費用が掛かるわりには、奨学金やらこれと言ったサポート体制があるわけじゃなし。外国人に対する差別は歴然としていますから、奨学金制度がたとえあったとしても私などは端から対象外でしょう。ほんとに私はどうなるのでしょうか・・・といった心細い感じです。

日本のオペアの斡旋してくれたところは一応私の学歴やら留学意図からして、医師である Dr.ジョリーのお宅をホームステイ先として割り振ってくれたわけなんだけど。期待外れというか、ここの家庭は、ひじょうに忙しく、うるさく、よく汚すし、私は余り居心地よくありませんので、家庭を変える算段をしています。オペアのための斡旋所というのは、この近辺でなくとも中央ロンドンなどに軽く見積もっても10以上もあって、普通は簡単に見つかるのですが、いずこも夏季休暇中なもので、今すぐ動くのはちょっと難しい感じです。どういう事態においても、何かを学ぶということは出来るものですが、あまりに神経が疲れるような状況はよくないので、静かに落ち着いて勉強出来るような環境を見つけたいと思ってます。

私は生来そんなきつい性格じゃないので、もっと押しが強くないと将来もこの国の人間たちとは渡り合ってゆけないかと思う。心もとない限りですが、自分のような柔な性格でも、幸せでいられる世界があるはずだと信じたいのです。要するにご縁があるかどうか、それ次第みたいだね。それもまるで暗中模索のていです。

ところで、あなたからお話のあった我らが京大の先輩の Mr.X.のことだけど。どう思うかということだけど、よくは解んないのです。ただ一つそうじゃないかと私が微かに不安に思うことは、彼が学究肌なのはいいけれど、本来的にいつ「成長すること」やら「年令に相応した社会的役割をとること」に無意識的に不安を覚えているのじゃないかということです。それは、彼が学問についてあれこれ関心を言い募る裏に隠れているのかも知れない。もしそうならば、それを根本的に治療しなければ、何をしてもダメだと思います。私は、彼の学問的姿勢を‘後退(ごまかし)’ではないかしらと憂慮してます。私は彼に自己をごまかした形で生きてもらいたくありません。専門の人によく相談するのがいいと思ってます。自分の足の下の‘無い穴’に脅え、不安を覚える人間は正しく導いてくれる人がぜひ必要なのです。愛だけでは十分ではありません。いずれにしても何かしらどこか自分のナルシシズムをぶち破らんといかんと思う。純粋な個の自覚から普遍的な他者へのトンネルをつくらんと、彼にしてもあなたにしても私にしたって、それぞれが擁護するところの学問の永久性が薄くなると思うしね。だから彼には頑張ってもらいたいと思ってる。前進あるのみですかしらね。

では、いずれ又ね。 チズより

.....



1972年7月26日

マコへ

昨日あなた宛てのエアレターを投函したところなのに、就寝前のひととき、まだまだ言い足りない気分であるものだから、又々書いています。両親宛てには既に十何回かたよりを送ってはおります。帰省した折にでも読んでね。でも殆ど大して辛いことなどは書いてませんけど。

実際に、とても想像しにくいと思うのよ。何と言っても、日本にいれば暮らしは中流の上で、立派なつもりで堂々と生きていたのが、ここに来れば、自分を売り込めるものと言えば家事労働力なのです。それでもオペアっていうのは英語の勉強を目的とした語学留学のつもりだからちょっと女の子の方にはプライドがあるんだけど、雇う側にしてみれば小遣いをあげて食べさせているという感があり、その分はバッチリ家事手伝いをやってもらおうって魂胆なのです。当然といえば当然ではあるんだけど。何と言っても奉公慣れしていない、お嬢様っぽいお育ちのか弱い日本女性の身では途方に暮れ、傷ついてしまう。なんで？という戸惑いばかりで、万事違和感が付き纏い、本当に惨めな思いをしている人が殆どです。

そのうち徐々に英国人氣質が解って来ると思うけど、ものすごい誇り高い感じだよ。実際経済的には落ちぶれかかっているのが現状だろうと思うのですが、いわゆる財産家という物腰を頑として崩そうとしないのには感服します。時折見事にエレガントな装いの老婦人や老紳士に出くわすと、彼らのその良きものというのがまったくよく解るのです。オペアの友だちが言うのには、昔から

のものを店に並べて置くとアメリカ人が高く買ってゆくのでひどくイージーで、つまりは働かなくとも食べてゆけるんですって。居食いで凌いでというわけだね。本当にどうして食べていってるんだろうと人々の顔を見る度に頭を傾げます。風采の立派な体格とお顔立ちの人がガラス磨き・床磨きをしていたりします。そして、あっちやこっちに職安広告がデカデカと貼り出されて、職を変えてみませんかとかいろいろな甘い言葉で誘っているというわけ。皆が競ってちょっとでも高い給料をもらえるポストに移ってゆくという、実にイージーな感じです。実際に働き手といっても殆ど下層階級の人間なのだけど。黒人とかパキスタン系の人、それに教育程度の低い白人等、適当に上手に使われているって感じなのです。他国人がワンサと寄り集まっている国だからでしょうか、生粋の英国人のたやすく人を寄せつけないってのがよく理解できる気持ちです。棲み分けというか、それで結構うまく納まってる嫌いがなくもない。ともかく人間には根っから優劣があるということが大前提として幅を利かしている国です。相手にするには手強いわけ。それをどう見てもやはり私には不利と感じてしまう気弱な私がむしろ問題でしょう。今後のトレーニングのこと、真剣に考えています。アメリカ行きはなぜか気が乗りませんし、それに今、日本に帰ってことはバカバカしいじゃない。私が日本に帰って、ちょっと英語がしゃべれたって、何の足しにもならないもの。私は焦らず、しばし自分がここで育ってゆく過程を見詰めてゆきたいと思ってます。

とても可らしいのよ。一緒に来たオペアの女の子たちが集まると、断然日本人であることに誇りを持つとか、すごく鼻息荒くなっちゃって…。それで、でも変にむきになって気が強くならなくともいい、ゼントルで優しいのでいいんだ

とか、お互いに慰めあうの。皆辛い中でも卑屈にならずにしようと励ましあっている。私は25歳で、教育程度も一番上等で、確かに話の内容が一番優れていたりもするけれども、他の女の子たちには随分と力づけられています。何かの拍子に或る子が私に言うわけ、＜あなたは確かに頭がいい。話してて解るけど。人間の上ばかり見てきたせい、ちょっとアブノーマルだ。うんと下の平凡な女の子たちをも考えてほしい・・＞って。妙に可笑しかったわ。話の前後の脈絡を語らないと解りにくいでしょうけど。確かに私たち、あなたも私も上等のカンズメで、全然いろんなくだらないことを知らな過ぎたかもですね。自分では、私って大して頭いいとは思わないんだけど。どこかぼんやりした夢想家っぽいところあるし、だからかしら興味・関心にちょっとばかし斑がある、いわゆる高級な知的嗜好に偏していたかも知れない。私って、本当にどう生きようとしているかしら？今、こんな具合にあれこれくだらないことに追われておりますところ。

でも結構おもしろいわね。セラピイと同じだけど、まるで進展がないと頭痛めていても、ふと何かのきっかけで停滞した関係がうまく流れ始める。今や私とレベッカの関係がそうです。しかし、セラピイ関係とも違って、何と言ってもジョリー夫人の気分次第だから、結局はどうしようもないのですけどね。いろんなこと勉強させてもらっているとはいえ、どう言えばいいのやら、押しが強いというか、厚かましくも身勝手でもう辟易します。イタリア女性というものを知らなすぎるという、こっちの弱みが問題なのでしょうけれども。イギリスに来て、なんでイタリア女性で苦労しなきゃいかんのかと、まずそこが釈然としない。徒労感は募るばかりです。なにもイタリア女性に恨みがあるわけでもないし、ほら例の岩倉にお住まいの文化人類学者・谷教授の奥様はイタリア人よ。元々

母国では英語教師だったとかで、私は彼女から英会話を渡英する前にしばらく学んでいたでしょ。彼女はとても穏やかなお人柄で、ご夫婦仲もそれはよろしくて、熱々でしたしね。素朴にして可愛らしい印象だったのよ。お別れの際に贈った、東京・赤坂の輸入雑貨店で私が買い求めたノルウェーのキャンドル立てをひどく気に入って喜んでくださったし。いい思い出しかないのよ。

こちらで私は、それは誰でも日本の女の子たちは皆そうかも知れないけど、必死になってホスト・ファミリーに喜んでもらい役に立とうとするんだけど、もういい加減に馬鹿馬鹿しいので手を抜くことを考え始めています。そうじゃないと全然勉強の時間がとれないのです。たとえ無力な立場でこき使われ、威張られていても、こちらが利用してやってるんだくらいに思い、自分を守ってゆくことが肝心よねとか、オペアの友だちらとは折々に話して慰めあっているのだけど。今日ふと精薄児を対象としたプレイ・セラピイだったらやるかも知れないと思いついたの。そうした施設などを見て回るのもいいかも知れない。この状況はやはり良くない。断然ここで真っ当な就職口を見つける覚悟を決めました。一応9月からのつもりで、これから少し動いてみます。ジョリーさんの家族は皆揃って8月17日から2週間ほど旅行するので、その間までには絶対に話を付けるつもりです。あなたから見れば全くくだらないことに追われているみたいでしょ。でもこうしたことに意味がなくもないと思ってる。今ここに至ってようやく万事が自分次第なんだということが分かり始めた。どうせ敷かれたレールに乗つけられて安住できる私などでは所詮ないのですし。大きく成長するためと思って、頑張ります。

では又ね。 チズより

.....



1972年8月5日

マコへ

久し振りの和やかなおたより、どうもありがとう。暑くて死んじやいそうだけど、死なずに生きているとかですってね。それに『柳月堂』なんて、なつかしいじゃない！この頃頻繁に加茂川の辺り、あの橋、この流れと思い出すのです。別に涙が出てくるわけじゃないけれど。誰とももう話をするのも厭で、黙っていたい気持ちになるのは、やっぱりそろそろホームシックなのかと思われます。

ところでホームスティ先での今の状況だけど、うまくいってるの。まあやっと成功していると言えそうです。実際オペアの仲間に話せば、まあ、ひどいと呆れられることばかりで、私も辛くて、時折気が昂ぶって吐いたり、ひどく落ち込んでたりもしたけれども、私は本来セラピストなんだから、こうした状態を自ら收拾できずにいるというのはあまりに不甲斐ない、残念無念だとは内心想っていたの。ホームスティ先を変えるというのは安易な解決策だけれど、しかしながら一番問題なのは、誰が私にどうした・こうしたということじゃなくて、私がこの状態の中で自分を主張し、他をうまく支配できなかったということだと思います。言語能力の問題、家事のやり方の違い。いろんな自分に不利なことがあったのだから、絶対無理はなかったのだけど、どうしてももう一つこの家庭を好きになれなかったし、自分の世界に逃げようとばかりしていたのかも知れないと気づいたの。ジョリー夫人にしてみれば、レベッカを私が可愛いがらないということが最大の不満のようでした。あの気難い子をどうやったら手なづけられるか、これまでこの家に幾人オペアが暮らしたのか聞かなかったけれど、誰も成功してないのではなかつ

たかと思う。レベッカにしたっていい迷惑なのです。ごく最近、ついに或る日ストライキ起こして、私はジョリー夫人と話し合いをしたんだけど。彼女はものすごい説得力があるの。いろいろと話せば、なる程と解りあえるのに、あちらは何しろ時間に追われていて、レベッカそっくりで癪性だから、ついつい苛立った怒りっぽい物言いになるというのが理解できなくなかったけど。満更悪い人でもないということ。で、彼女の言い分というのが、やっぱり私がこの家になつかないということ、特にレベッカのことなわけ。＜何か言いたいことがあったら言わなきゃ！私にはあなたがどう思っているのか解らない・・・＞と、彼女は言うわけです。おもしろかったわよ！だけど、本音など不躰でとても言えるものじゃないんだよね。私はもう惨めで、涙ぼろぼろで泣くしかない感じだったけど。とにかく一応話したことで、御互いにあっちもこっちもちょっと気が紛れたみたいなのよ。

その後で私は自分の気持ちの立て直しに少々時間が掛かったものの、突然自信を持つのだという気持ちになるや否や、事がうまく進展し始めました。レベッカが私にひどくなつき始めて、毎日私の周りにまっわりつくので、これ迄のようにジョリー夫人の周りでうるさく駄々をこねて、夫人をイライラさせることがなくなったし、彼女も大きな声で怒鳴らずともよくなったし、レベッカは殆ど私の部屋で遊ぶので、ジョリー夫妻の語らいも落ち着いたものになったようですし、そんなこんなで家庭内はごく円満にいつてます。そうなると、彼らご夫婦の私に対する態度も断然親しみを帯び、気を遣ってくれることにもなりましたから、私の気分も悪くありません。レベッカは、そもそも全然物怖じしない、活発で芯の強い子どもですし、それに想像性豊かな面があり、遊びには退屈するということがありません。そんな子だから、

コントロールするのもコツがあって、私自身の態度形成にも、大きなプラスになります。つまり自分が優位であるということを絶対に譲らないというのが肝心なわけです。私は大人で、あなたは子どもなのだとことを彼女にわきまえさせるわけ。万事がその上での話になります。それが取引・駆け引きの類いだとしても・・。やっぱり生粋の英国人と違って、英国に外国人として暮らしている人たちの淋しさがこの家庭にはあるから、その点を考慮する必要があったようです。要するに、まあ、こういうことだわ。＜I need you ! I want you ! I love you !＞をもっともって彼らに言ってあげる必要があったということかしら。そんなこんなで、私にとってもひどく勉強になったのです。やれやれで、これで一件落着というわけ。

しかしながら、この家にこのままじっくり居座るつもりはなく、内心では忙しくこの家から‘逃げる算段’をしているというわけです。例の就職の件は、一つは9月に移動があるので、もし空きがあれば知らせてもらえるということになっていますし、他にももう一つ、次の日曜日には或る方に会い、いろいろ情報収集に努めます。援助してもらおうことでしょう。テムズ河下方のずうっと南に位置する、ここTeddingtonから中央ロンドンへ出掛けるって結構大変なのだけど、何やらこの地で拮据りが始始めていて、嬉しいのです。

ではいづれ又。 チズより



1972年8月31日

マコハ

ようやくホームステイ先を変えました。遥かロンドンの北に位置するHendonへと移り

ました。フォード家です。まるで籠から逃げ出してきた鳥のように、さえずってます。よくまあ、あんな所に居たもんだと、今になって呆れる思いです。確かに慎重で我慢強い私ではあるわけだけど、ややもすると相手の気持ちを考えてやり過ぎて、この人はダメな人だとか、もういい加減に訣別すべきだといった決断が鈍るように思われる。やはり事態と相手についてきちんと見極め、そしてそれに則って行動することを覚えました。そしてオペアとしてホストファミリーと暮らすにしても、家庭の一員とならなきゃならないわけでもなく、部屋をあてがわれて食事をいただくのだからお世話になっているからといって、妙にへりくだるのは考えもので、自分がいなくちゃこの家は大変なんだし、ちゃんと必要であって、やることはやるんだし、いつでも気に入らなきゃ出てゆけるんだからって、気を強く持つことが肝心みたい。ちょっぴり‘やくざ渡世’って感じにもなるけど、世の中へりくだればへりくだる程踏んづけられるだけなんだって感じが濃厚で、全くもって自分を正しく扱ってもらおうと願うならば、それ相当の遣り手であることが望まれるみたい。気骨が試されるというわけね。

私はこの家庭で、ごくにこやかに日々暮らしています。フォード夫妻は絨毯を商う店を2軒お持ちらしく、夫婦お揃いで出勤は朝9時、帰宅は夕方5時過ぎといった具合に毎日規則正しい生活で、全体にゆったりとしたリズムです。日中は私一人家に残されます。頼まれた用事を片付けると、後は自由気儘な自分だけの時間になります。フォード夫人に頼まれた以上のことはしないことにしました。奥さんが台所で料理をしている時に居間でご主人とお喋りしたり、犬とふざけっこしたりしている時もあるし、奥さんの料理を傍らで見ている時もあるし、随時適当に気儘にやっています。あちらも全体にリラックスして、

暢気で気儘にやろうって夫婦なの。さすが二人の子どもを大きくして、5匹の犬を養っている奥さんだけあって、あまり細かいことにこだわらないし、ご主人をも、大きな子どもみたいに思って、何事も鷹揚に笑って済ませるといった態度なのね。ご主人もリラックスしちゃって、私をあれやこれやとからかっては嬉しがったり、時には真面目に英語を教えてくれたり、気が乗ると得意になって自分のレコード・コレクションを見せてくれたり、愉快なお方です。リラックスムードで、家の中もキッチンと片付いているわけでもなく、万事が余りやかましく言わずに感じてなのです。ご主人は、ステレオ・マニアで、そりゃすごい高価なテープレコーダーやステレオやスピーカーやラジオが居間でんと居並んでるんだけど、それはご主人の玩具だから、他の人は触ってはいけないことになっているんですって。ちょっとやはり操作がややこしいみたい。それで日中一人のとき、レコードを聴けなくてちょっと残念なのですが、まあ別にいいと思ってます。結構毎日忙しいの。英語学校にも通い始めたし、近くの公立図書館をフォード夫人に教えてもらったんだけど、それが大きくて立派な図書館で、もう感激なの。英語ますます頑張らなくちゃ！

ところで、そのステレオ・マニアのことだけど、フォード夫人に初めて会った時、ご主人がクラシック・ファンだって言うので、まあ私にしてみれば、それに惹かれてここの家に来たようなものの、でも当のご主人をみれば、クラシック・ファンにしては物腰がどうもだけ過ぎている人だなんて思ったのね。案の定、クラシック・レコードといってもせいぜいオペラとかが5、6枚ほどで、あとはギター・ミュージックとかチャカチャカした踊り出したくなるようなものばかりなの。歌が好きみたいです。とんだ思惑違いなんだけど。でもともかく

スピーカーの音は抜群にいいのです。もっと滑稽なのは、実はご主人のフォード氏は音楽を鑑賞するというより、ただ音量を高くしたり低くしたりして喜んでいるって感じなの。実に無邪気なわけ。フォード夫人は、あまりそれには我関せずって態度で、ただ笑ってほっとしています。高価な玩具を買い与えられた子どもそのままに、フォード氏は私に胸を張って得意がるのよ。全くおっかしいのです。私もフォード夫人に同一視して、全く男って、こうなると罪がなくて、可愛いものだと思います。でも奥さんは決してご主人を舐めているわけではなく、とても日本女性に近い感覚というか、寡黙にして従順というか、夫を立ててる風情があります。いずこも家庭は女でもってるんだなと妙に得心したのです。それから、どうやらユダヤ系の血筋のようなのですが、商人ということですから、知性とか教養とかには無縁なお育ちなのかもしれません。書籍類にはあまりこだわりはないみたい。百科事典やら世界文学全集の類いは書棚に見当たりませんしね。

なんと彼らの趣味というのが犬なの。ブリーダー-breeder でいらっしゃる。私などが見たこともないヘアレス〔無毛〕の犬なの。痩せていて細身で小柄で眼がグリグリしていて、何とも滑稽なの。珍しい種類なんだそうで、世界の品評会で賞をもらって。エンサイクロペディアにティーナとイーナの写真が採用されて載っているんですって。だからすごいわけ。人なつこくて、5匹がそれぞれに性格が違うの。お砂糖を泥棒するのがいたり、しょっちゅうお腹をすかしているもんだから、いつもブタと悪口いわれているのがいたり、おとなしくっていつもスローなものだから、食べる時つい横合いから他ののに食べられてしまうのがいたり、実に愉快よ。それ程貴重なお犬さまとは思えないのだけど、退屈はしないので面白がってます。

ところで英語学校へ行ってびっくりした。若い、私ぐらいの年齢の男性が教官なの。ちょっとばかりがっかりした。やっぱり女の先生に慣れているものだから。でもさすが彼、すばらしいリーディングなの。全くきれいな発音なの。ちょっと、アポロを華奢にした感じのハンサムな男性で、もの静かで、全然人を疲れさせないタイプなの。いいじゃない！本物の知性溢れる英国男児って、そんなのだよ。抑制が効いているというか、全く騒ぐということがないの。実に好感が持てました。

今日気分を変えようと美容院へ行き、ヘア・カットに、パーマもかけたの。カラッと可愛いらしくて、嬉しげにしていいたいじゃない。そう思ったの。フォード夫人の紹介で、アポイントメント(予約)を入れてもらって行ったの。一番その腕のいい人で、その人が一番いい(つまり高い)パーマをすすめてくれて、それで最後におつりをチップにたっぷりあげて、散財しちゃったというわけ。金のことはこの際言わない！とにかくその美容師さんが素晴らしく綺麗な喋りかたをするの。静かで優しくって、子どもがうろうろしていたんだけど、その接し方もさすがという感じで、私感心したの。さすがだなあって。いい感じの人に会えると嬉しい。耳に心地いい英語の響きの余韻が残るしね。

とにかく、ここしばらくはゆったりと生活を愉しむことにしたの。就職したとしても、英語力はまだ貧弱だし、一人でアパートに暮らすなんてとんでもない。ここ生活費って高くて馬鹿にならないの。だから当分オペアの身分で、こんなに自由に出来るんだから、もう充分です。前みたいに惨めな思いなど決してしてはならないと思ってる。もう気を煩わすことはありません。とにかく安心して下さい。 いずれ又。 チズより

.....



1972年9月17日

マコへ

ご機嫌いかが？明日から英語学校が本格的に始まります。月～金の朝の3時間です。入学に当たり、実力を査定するのにペーパーテストを受けさせられたのよ。あまり大していい問題じゃないなと思ったのだけど、結果からいうと、私成績が良かったんですって。それでトップクラスなのよ。英語の資格試験というのがあって、ロワー・ケンブリッジとプロフェンシーですが、どちらも世界的に通用するんだそう。それで普通はロワー・ケンブリッジの方から始めるのですが、プロフェンシーの資格試験をめざすコースに入ってしまったというわけ。付いてゆけるかどうか今から心配です。特にヒアリングがね。クラスは希望すればいつでも変われるとかだから、とにかく頑張ってみようと思っているところです。

英語の実力のほどはよく解んないけど、滞在4カ月目を迎えているのだし、やっぱり不自由さを感じなくなっているみたいなのが自分でも解ります。全然焦ってはいませんが、結構英語の勉強楽しんでいて、頑張っていると思います。朝、食事をしながら、少女向きのマンガ雑誌を読むのよ。傍らで奥さんが新聞を見ながら食べるので、私も手持ち無沙汰が嫌だから、少女向きのを買ったのだけど、それが結構いい勉強になるわけ。マンガだから会話体が殆どで英会話にいいですし。それからちゃんとした教科書も買い揃えて着々と進んでいってる。私の頭がいいかどうかというのは少々疑問に思うけど、勉強の仕方は知っているみたい。それから夕食の後、9時までフォード夫妻と一緒にテレビを見るの。ヒアリングにいいと思ってね。案外とアメリカ

のテレビ映画が多いのよ。まだまだ全てが分かるわけではないけど、大筋の内容は把握するぐらいにはなってる。それにはっきりとアメリカ英語とイギリス英語の区別は解りますしね。次第次第に進歩していったのは間違いないようです。

この前オペアの友だちの家庭を訪ねた際のことだけど、そこのお宅の息子さん(21歳で医学生)がいて、その彼のガールフレンドとも一緒に、皆で昼食を共にしたんだけど。私がとてもよく喋れたのに、自分で感心したの。ちゃんと自分の興味のあることならしっかり喋れるんだなあと思ったし、それから実力がやっぱり付いてきつつあるのだなあとあって、あまり焦ってもいなかったし、期待もしてなかっただけに、嬉しいと思いました。

それから、この家は高速道路に面して建っているの、その騒音のひどさったらありません。初め、私の寝室は表向きでしたが、裏のお部屋に変えてもらったわけなの。あまり騒音がひどくて眠れなかったのです。それが初めの1週間は辛抱できたのに、2週間目頃から気になってダメなのです。おかしいでしょ。深夜でも止むことなく、トラック便がビョンビョン高速道路をぶっ飛ばして通るのですから。どうして初めそんなに気にならなかったのかと、後で不思議に思えてなりません。きっと神経が昂ぶり、幾分感覚が麻痺してたのかも知れません。フォード夫妻の寝室は道路沿いだから、もう慣れていらっしゃるんでしょう。騒音で眠れないという苦情にも厭な顔せずに対処してくださったのはとても有難かったです。それで今度の新しい寝室は、かつて息子さんの部屋で物置同然にしてあったから、片付けるのがもう大変だったのだけど、どうにかようやく女の子らしい、きれいな部屋になったの。窓の欄にズ

ラッと人形やら日本のものを並べたりして、それに折り鶴をたくさんぶら下げたの。窓からの景色がすばらしいのよ。見渡す限り芝生の丘があり、夜には遥か遠くの町の灯が見えます。それから朝の光がすばらしく綺麗で、これでひとまず居心地のいい環境をようやく得たように思われます。

この前、裏の芝生の丘を歩いて行って木陰で休んでいたら、ひょいとリスが物陰から出て来たの。童話の絵本から飛び出してきたみたいな、尻尾のすてきに大きな本物のリスだったので、夢みてるみたいで嬉しかったです。野の花があちこちに咲いていて、タンポポなんて日本と同じです。とにかくどういう状態にあれ、私って、緑があって、可愛い野の花たちが見られないと淋しくなるたちなのだと思うの。だから今が最高に幸せなのかと思ったり、朝目覚めに窓の景色をみて、光を見て、一日がきっと嬉しい日だと思えるのは、やっぱり幸せなのかと思います。

そんなに少女趣味なこと言っても、やっぱりどこかで25歳を過ぎた女の感慨を抱く時があるわけ。ここのご主人は、いつも私のことを「小さな日本の女の子」と呼ぶのよ。実際おかしい時はケタケタ笑うこともあるはあるんだけど、どっかもう騒ぎたくないって、やはり年だなあって思うことあるの。そりゃそうだと思うのよ。結婚してなかったって、私は結構女らしくって、母親の素質十分なところあるしね。家庭を持って、じっくり収まりたいって気分は当然あるわけね。それで思うに、ここの奥さん、21歳の娘と25歳の息子を育てあげた落ち着いた貫禄があるの。あまり細かく考えないでおきましょうって暢気にやってるけど、結構小柄で痩せていて眼が大きいのかも解るように、抜けている人じゃないのです。ただそんなにいるさく言っても仕方ないわねって落ち着いて

いるというか。私はあまり人を簡単に好きになれないちだと思うけど、まあまあ彼女を気に入ってます。でも依然として気の抜けない私がいる。ジョリーさんここでは、言われたとおりにしないと叱られるって、まるで脅迫されているみたいな生活を送っていたせいか、ここの奥さんをもやっぱりどっか怖がっているところがある。全然そんな必要のないのに。結構好きな風にやらせてもらっているのに。でもやっぱりどこか気持ちが竦んでいるというか臆しているのが自分でも解るの。居候させてもらっているって引け目があるからかな。そのうちもっと気楽に出来ると思いますけれども。

英語の勉強も大事ではあるけど、もっとここの生活に慣れる必要があると思う。というのは、ここの人間たちは概して我が強いです。決して人の欠点や過ちを矯正せずにはおかないってところあるの。結局それもご都合主義ってものだから、誰彼の顔色を窺い、いちいちビクビクしてたら、こっちが全くボロボロに疲れてしまうと思う。だから絶対に持論を譲らないだけの強さを持たなきゃいけないとすると、私などは何と言っても、諦めのいい方で、おとなしい性質だから、分が悪いのです。全く日本が恋しいやら逃げ帰りたいやらと、私の強い人間たちに辟易する思いをする度について感じてしまいます。でも自分に自信を持てるということは元来とて素晴らしいことなものですから、私もその方向で素晴らしくなれるよう、努力したいと思っています。今ではここの家庭にも慣れてきたし、ただ学校に通うことだけに大きな目標を置いて、この3カ月を過ごしたいと思います。その学校の通り道だけど、バス停から歩道を逸れて横の藪へと分け入ってゆくと、原っぱがある。そして小さな公園があるの。そこの道を辿ると、殆ど人は通らない抜け道なんだけど、学校へゆけるのね。私の秘密ってわけ。野原って日本と全然

違わない。その風情を懐かしみながら、しばし日本に帰ったみたいなお気分になり、必ずちよっぴりホームシックになりながら、通り過ぎるのです。

こうした今の生活には何も不満がありません。とてもうまくいっていると思うの。でも来年の秋から4年間というと、すごく遠いなあって、よくもそんなことに思いを寄せてやってきたもんだと思うのです。でも考えてみれば、一応心理学の学位を取った後とか、それから1年間の臨床経験を経た後で、さらに4年間の専門的なトレーニングを受けるのはこちらの人々の普通やっていることですしね。そりゃ総てがそうかは解んないけど、そのような規定があるのだし。だから、特別贅沢なわけでもなくて、サイコセラピストになるためには絶対にそのようなトレーニングは必須と言っている。しかしながら、実際のところこんないい年をしながら、自分で金を稼げるところか、誰かに又経済的に依存しなくちゃなんないということがどうしても収まりが悪いわねえ。それが官費留学ならまだしも、私費だからねえ。親にはまことに頼みづらいです。それで何かいい方法がないかといういろいろ思案を巡らして悩んでいます。

自分では随分と慎重に考えてきたつもりなのよ。今までのところは、やはり私の当初からの方針、つまりトレーニングを受けるまでに相当の準備期間を要するというのは正しかったと思うの。それに重大なことは、やはり自分の眼で見て判断するということだね。こちらに来てから情報を得た結果、ハムステッド・クリニックに行くの止めようと思うに至ったの。どうやらかなり落ちぶれかかっている。タヴィストック・クリニックの方がうんと今ではいいって、そんな評価を耳にしたわけ。両方とも建物を見て、説明書を読み比べて、今思案を重ねております。

タヴィストックの方へは、そのコースの先生宛に連絡してあるの。とにかく今年のコースは9月の末なのだけど、定員オーバーなので、来年になるって。それはいいのだけど、一応申し込みすると、今年の12月の末までには決まるの。きちんとした面接試験はされるでしょうが、受理されたとしてもそれで問題が解決したわけではなくて、一応初めの1年間でその人の適性が調べられるようです。もし良ければ、次ぎへと進めるようになっているの。それから3、4年目は、クリニックで症例を担当させてもらい、報酬も得られるといった具合なの。タヴィストック・クリニックは、英国の国家機関が援助している大掛かりな、何だか多様な研究機関がぞろぞろあって、トレーニングコースも精神科医・ソーシャルワーカー・臨床心理学者・サイコセラピスト・学校の教師たちなどと職種別にいろいろあって、それが交叉し合っているセミナーもあり、とにかく統合的で、ガッチリと現実のこの世界をそして将来をも見据えているって印象があります。白っぽい、コンクリートのでっかい建物です。在籍中の4年間はパーソナル・アナリシス(personal analysis)が必須とされており、まずは乳幼児観察に研修の主眼が置かれている辺りが気に入ったわけ。理論に縛られない、融通性のあるサイコセラピストになれるのは、むしろタヴィストックの方に思えるの。

ハムステッド・クリニックの方は、最初からまず精神分析理論をみっちり頭にたたきつけられるところです。私ね、大学の頃からアンナ・フロイトとそのシンパやらの著作をいろいろ読み耽っていたから、すごく憧れていたんだけど。子どもを実際にどう診て、どうしたらいいかっていざ臨床となると、どうも頭ガチガチでダメだと思えてならない。アンナ・フロイトの臨床スタイルに或る種の行き詰まりを覚えてたわけだから。いざここに至って

俄然興味が失せた。まずはウエルカム〔歓迎〕されるって雰囲気があるでないんだもの。ハムステッド・クリニックって、ごく寂れた古びた、いかにも暗い建物で、看板もない。穴蔵で、ものを考えているような感じ。今までずうっとハムステッドって思い込んできたから、未だちょっぴり未練があるのだけど。なんだか建物を探し当てて、ショックだったの。本当に、こじんまりと始まった、閉鎖的な研究グループなのだなあとと思います。古いごく普通のレンガ建の3つの家で、あちこちに散らばっているのが、そうだったの。地下から子どもを連れてた親が出てきたよ。メイン・ストリートからは離れたごく普通の住宅地にあるの。看板がなくて、どうして子どもはやってくるのかしら？ 何だか精神分析の暗い、しつこいイメージがその建物から臭ってくるようで厭なものでした。そして呆れたことに、一つ道路を越えた向こう側にタヴィストック・センターの白い、モダンな建物がでんとあるじゃないの。何よりもウエルカム〔歓迎〕されるような雰囲気があるのがいい。私は慎重ですし、もうしばらく考えてみますけど。

ところで、タヴィストックではジョン・ボルビー(J.Bowlby)のセミナーがあつたりするのよ。私が持っていた本の一つが確か彼の著書だったと思うけど。精神科医、ソーシャルワーカー、セラピストを問わず、人間との関わり合い方を学ぶ者にとって理想的なセンターだと思われる。牧康夫先生をふと思いました。私はすごく精神分析理論を理解したいし、熱烈に憧れを持つけれど、彼のように学究的であることは善しとしない。クライエントが何よりもまず第一なのだということ。そのことを忘れないでいたいし、だから私は頭でっかちで、子どもをすなおに診れなくなる自分が怖くて、日本を飛び出たのです。一人で独り善がりに頭でっかちになるのが絶対厭だったのです。

そうかと言って、精神分析理論を絶対に捨てられなかったし、そんなどうしようもない不安に駆り立てられて、此国にやって来たのだと思います。子どもを子どものために考えられるセラピストになりたい、それと共にいずれ後継者を育てられるような、規範やら規律を身に付けたセラピストにもなりたいたいね。いろいろ思うことはあるけど、取り敢えずはケース報告が書けて、皆の討論にも堂々と加われるだけの語学力を今から養わねばと改めて思ってます。いずれ又。 チズより



1972年10月24日

マコへ

しばらくご無沙汰でしたが、私の状況は親宛てのたよりで既に詳しくお知らせしておりますとおりです。オペアからナニーnanny(家庭の子ども世話係)に職を変えたのです。Hamsteadの高級住宅地に移り住みました。ここに至り、そろそろ責任のある仕事に就きたいということもありましたが、【タヴィストック・クリニック】に願書を出すのに、やはりオペアという身分は何らインパクトはないし、体験重視という【タヴィストック】の気風に合わせて、家庭での住み込みのナニーという身分ならば、まずまずアピール度は高かろうとあれこれ斟酌した結果でもあります。

Hendonの英語学校の方は勿論止めました。プロフェシエンシイの資格試験を目指しているわけでもありませんから、特に止めることの弊害は何らありません。むしろその代わりに、今後自由な時間は少なくなりますが、その分お給料はいいですから、週3回の半日の休みを利用して、週2回の個人レッスンを受けることに決めました。その方が私固有のニーズに適ったものに

なるでしょうし。今後【タヴィストック】に帰属するとしたら、いずれはプロフェッショナルにふさわしい英語力を身に付けねばなりませんから、その方向へと的をより絞ってゆく所存です。

ナニーの仕事はとてもやり甲斐があります。ベンハム家の1歳ちょっと、それに3歳半の女の子たちは気立てが良く、実に可愛らしいです。住まいはハムステッド・ヒースにごく近く、閑静で瀟洒なお屋敷が居並ぶ、高級感溢れる一角です。万事が清潔で、秩序ある、申し分のない生活をしています。此国に来て以来、今迄あまり秩序とか清潔感とかとは無縁な暮らしでしたから、今の生活が夢のようです。人それぞれに癖があるのは当然で、それで居心地いいとか楽だとかの暮らしぶりは決まってゆくものだから、赤の他人がそこに割り込んでとやかく文句を並べることはありませんけれども。それにどうせ居候の身分では我慢するしかないのは分かっているのですが、とにかく日々の暮らしに最低限の秩序とか清潔感とかがないと、終いに体も心も拒否反応を起こしてしまう。ようやくそうした事柄が分かってきました。少しずつ気持ちのこわばりも快復しつ

つあります。
クラシック・コンサートにもなるべく休みの日には出掛



けるようにしてます。自分の精神の向上に努めたいと思ってます。高級な人々の中で、まっすぐ自分を磨いてゆけることを祈っています。子どもらの世話に明け暮れ、わざわざたよりするのは億劫ですので、ご無沙汰するかとは思いますが、安心して下さい。

こちらの新聞に「読字困難」について面白い記事が載っていたので、切り抜きを同封します。これ迄あまり注目していなかったことなので、ちょっとショックだったわよ。どうぞあなたもご覧になってね。いずれ又。 チズより



1972年11月20日

マコへ

ちょっとあなたにご相談です。3歳半のデボラのことなんだけど。明らかに言語障害があります。おかしいのだけど、それがよく解んないの。小児科医もスペシャリストも何ともないとひどく楽観的なこと言ってるんだそうよ。ベンハム夫人などは、4歳の子が旅行先でヒョンなことから急にしゃべり始めたとか、楽観的な気休めをあれこれ聞き込んでくるんだけど。実際はこうなのよ。何か欲求する時はいつもワアーワアーなの。すぐ泣き声になるんだけど。ミルクが欲しいの？ ミルクって言わなきゃ、言ってごらんって言わせるの。恥ずかしそうに、2、3回促されて、やっと口を開けるんだけど、ミルクってはっきり言えないの。その繰り返しをここ1カ月延々とやってる。そして依然としてアーアーなのよ。目の前にある時は、指さして、アーアーだけど、ない時はコップにつぐ真似してアーアーなの。首を傾けて、いかにも惨めそうな顔をして言うんだけどね。私はいつも紙ナプキン、チョコレート、ビスケットって、彼女が欲しいものの名前を教えるんだけど、彼女は一応真剣に真似するの。名前をもらうと意志がはっきりするって感じの態度をいくらでも示すんだけど、どうしても物に名称があるってことが彼女には解んないのか、覚えられないのよ。発音のはっきりしてるのは、アップルとダディとマミとジャクリンだけ。サンキューとかプリーズを言わせるよう

に躑けているんだけど、もごもごと、何度か促されてやっと不明瞭にその場限りの言い方をするの。私が発音の訓練をしてやり始めてからか、舌をペロペロと動かして、音を出すのが嬉しいのか、毎日ワアーワアー大きな声で一人遊びをやってます。赤子のジャーゴン jargon そのまんま。1歳ちよつとのジャックリンと全然変わりません。

その一方で、物の置いてある場所がかなり複雑でもちゃんと理解してるとか、やってはいけないことをジャックリンに教える時なんか、実に堂々たるもので、まるっきり私の真似をして、＜NO, NO, NO！＞って怒るのです。私のやることを何でも真似したがって、今日なんて私が見ていない隙にジャックリンのおしめを変えてやろうとしているのを見つけて、驚いて止めたんだけど。まるでおかしいのよ。指しゃぶりがまだあって、叱られた時やら一人で退屈してる時など、いつまでもボオーと惨めな顔して指なめに没頭してます。ちょっと刺激を与えたら、ニコツとして、明るくキャキャ騒ぎ始めるんだけど。ハサミは使えるし、ボタンは嵌めれるし、ボールを投げたり受けたり出来るし、ジャックリンの見張りは出来るし、絵本には興味があって、よく一人で眺めているし、元気なマシュマロのような女の子なのです。幼稚園の友だちらとはとてもうまくいく子どもで、一見おとなしく明るい、いい子なのです。ただ、ドアを閉めなさいとか、やさしい指示の言葉をもボオーツと聞き逃すとか、言語の刺激に対して概して疎いです。ここのご主人がドイツ人で、以前ドイツからの英語のしゃべれないナニーがいたとか。混乱しているのかしら。口は重いつて感じの子ですが、最近いやに大声でペロペロバアーバアーと一人で遊んでますし。特に問題視するのもおかしいかと思うのだけど、記憶力（言語、主に単語）が今ひとつで、どうしても気になるの。発音させると一生懸命なのだけど、ペロペローってなる

し、たとえ鸚鵡返しに正しく発音できたとしても、それは覚えられたことにならないのよ。どう思う？

まず不可解なのは、この家のベンハム夫婦の態度よね。私がこの家で最初にご夫婦に会った際、つまり面接に訪れた際だけど、ご主人の仕事の都合とかで夜分遅い時間帯が指定されたからでもあったけど、子どもたちはそれぞれもう就寝しているというわけで、寝室に案内されただけで子どもらの顔もまともに見なかったし、なんら面と向かって話してもいないわけだったの。迂闊だった。まさかこんな‘伏兵’が待ってるなんて！勿論私の履歴については先方に話してるわけだけど。ナニーの仕事に学位は関係ないし。そもそも彼らにとってどういう意味でも援助を求めているという態度では一切ない。だから、頼まれもしていない、要らぬ手出しも口出しも私の立場上出来ないわけ。嵌められたやら騙されたというのとも違う。そこに何ら悪意はなさそうだし。しかし、このおかしさは何だろうと不可解で、釈然としない思いが募るばかりです。そういうわけだから、ぜひあなたにお話してみたかったの。どうぞよろしくね。いずれ又。

チズより



1972年12月8日

マコへ

お久しぶりのたより、どうもありがとう。デボラの言語障害の件ではいろいろ教えてくれてありがとう。運動性の失語症であるかも知れないけれど。もう一つこの子の場合は、かなり特殊な環境であったということが考慮されていいわね。つまりいつも身の回りの世話をする者が、英語をろくにしゃべれない者であったということが何らか彼女の言語発達に影響しているのじゃない

かということ。調べてみたら、1年目はメイという英国人のナニーで、2年目がドイツの殆どろくに英語をしゃべれない女の子で、その次が、南アメリカからの女の子で、この子はまあまあしゃべれる女の子でした(私、一度引き継ぎで会ったから、知ってるの)。殊に2年目の女の子が、ドイツ語と英語をチャンポンにしてしゃべっていて、デボラは奥さんの話によると、ドイツ語をも理解したって言うのよ。今でもだけど確かに理解力はあって、<これを下へ持って行って、ジョージ(庭番)に渡しなさい>と英語で言われれば、彼女は理解し、かつ実行できるの。でも、それだって直接的に生活経験に結びついた事柄だけの気がするし、彼女が解っているのか解っていないのかほんとのところ解らないわけ。世話する側が英語をスラスラしゃべれないとすると、つい押し黙って何でも彼女にしてやるでしょうし、相互にただニコニコと笑って通じ合おうとすることが総てになりはしないかしらね。喋るということを常に意識しないまでも、何らかの気詰まりを持っている人間が常に側にいるということは子どもにはよくないと思うの。

でもこれまでのナニーたちはいざ知らず、肝心要なはずのこの奥さんのベンハム夫人などは呆れるほどにまるでよく喋る人なの。ごくつまらないことでも、ああいうことがあった、どうだったと、自分の一日の心に留めた、珍しかったあれやこれやを私に喋り、もう一人の家事手伝いのオペアのアンナに喋り、庭番のジョージに喋り、帰宅後のご主人にも喋るという具合に、まるで喋ることに生きがいがあるといった感じなのです。そもそも社交人だから、ごくつまらぬことでも大きな話題にできる能力はあるわけ。それにしては、娘が変なのだけど。彼女、ずいぶん可愛いがっているのよ。子どもにはよく喋っているし。どう考えても釈然とない。やっぱり不思議極まりないんだわ。

さっきもデボラにホース(馬)って言わせようとしたわけね。絵本の中の馬の絵には随分興味を示して、それで私の口真似を嬉しそうに懸命にするんだけど、腰砕けでハッハッハッになっちゃうの。意味不明瞭もいいところ。ところで、下の子のジャッキーの方だけど、彼女に早速に私のここでの通称のチェリーって私の名前を覚えさせたんだけど、私の口真似をして大して苦もなく覚えられたわけなの。アンナとかジョージとかも言えるし、まだ音の弁別自体は鮮明ともいえないけど、Hello!とかOh, dear! (あらまあ)なんて、私の口真似を頻りにやっている。それで近頃ではデボラの方も、オープン(お口を開けなさい)って、私が頻りに下の子に食事の時言うものだから、それを口真似して言ったり、チェリーとかアンナとか何かの時にヒョンと言えたりするようにはなったけれど、依然としてワアーワアーとなりがちで、喃語レベルでどうにもなりません。ところが床にゴミが落ちていると目敏く気付いて、大きなホーキを持ってきてはゴミ集めしたり、下の子に食べさせるってこともしたがつたり、私たちの手伝いをしたがつて、時には結構何かと役立つの。気の付く子どもで、好奇心も強いし、知能は遅れているとは思わないけど、とにかく変だよ!私の方が呆然自失する始末だ。

ところで舞鶴の家からの小包、受け取ったんだけど。大笑いしちゃった。何かとこまごまといろんなものがぎっしりと詰まっていたのよ! よっぽど外国暮らしで不自由してるんだろうと思ったのかと笑えてきちゃったけど。でもやっぱり有り難かった! 懐かしいし、近々日本のオペアの友達らにもお裾分けしてあげます。それから最近友達になったスイスから来た双子児の女の子にも。羊羹ぐらいは食べられるでしょうよね。英語学校での顔見知り。偶然駅前ですれ違ったというわ

け。一応彼女らはオペアではあるんだけど、ユダヤ系の高齢者のためのケアハウスで賄いなどのお手伝いしてる。寮みたいなのがあって、他にも幾人も同じようなオペアの子たちがいるみたい。小学校の先生をしていたとか。二人ともクラシックのファンだって。趣味が偶然一致して、会って嬉しくて喋りに喋るわけ。年齢も近いのよ。25歳なの。お互いにお茶にお招きし合うとか、交際してゆくつもりです。では又。 チズより

.....



1973年1月17日

マコへ

久し振りに元気な便りありがとう。あなたのお仕事の方も充実し、いよいよ地歩を固めつつあるのが感じられて、まことに感無量といったところです。人間、如何なる状況においても、明日を追いかけて、何とか生き延びようとしてゆくものなのですね。

ナチの強制収容所アウシュヴィッツにいたフランクという例の実存分析家が、<窓から見える木に引掛かっている一枚の木葉でも、生きるささえになる>って書いてらしたのを覚えている。ここのお屋敷の三階にある私の寝室の窓越にイチョウの木の枝の先っぽが見える。それを眺めながらボォーととりめなく思いに浸ってたりすると、実にそうした心境になります。近頃確かにちょっとした‘閉塞感’ ぎみなのです。

【タヴィストック・クリニック】からのインタビューの連絡を待っているわけだけど、ただ時が過ぎるのをジッと待っているといっても、結構私は今ここで得難い経験をしていると思う。住込みのナニーnanny として2人の幼い子どもの世話に

日々奮闘し、時折気疲れのせいか、些か微妙なムードの時もあるんだけどね。子どもたちデボラとジャッキーはどちらもよくなついてくれて可愛いし、まことに扱いやすくなってる。ちょうど1歳過ぎとか3歳半過ぎというのは、成長の変わり目なので、ここでの3ヶ月余の子育て体験は私にとってかなりの収穫と言えます。でも実際、この生活には或る種の行き詰まりを覚え、近々転職のつもりであります。養護施設でのアシスタント・ハウスペアレントという職種で、目下「労働許可証 work-permit」を申請中なのです。

私の英語力は、当初はまるで三歳児以下になって悲観すること頻りでしたけれど、この頃グイグイと調子を上げております。最近、あなたから頼まれた翻訳の仕事に取り組みながら、あらまあ私もかなり進歩したなあと感じ、嬉しくなった次第です。でも実に日本語っていうのはサイエンスを語る場合には、あまりにも漠然としている！その違和感ゆえに、私はかなりショックを受けたのね。フィーリングを語るには最高なんだけどな・・。

ところでつい先日、『英国博物館』へ行っていろんな遺物を見たけど気分悪くなった。あんなものは総て、奢るものが奴隷を買い取ってつくせたもので、ヒト家畜と同様であった者たちの魂が私の気分をおかししたの。それにしてもリアルなのよ。何もかもがね。例えば、男性の性器にしても。やっぱり牧畜民として生きてきた彼らとの違いをはっきり感じたし、とにかく微細にリアルに表現することに私はどうしても慣れることが出来ない感じがするの。例えばその昔、日本人が恋しい人の顔を思い浮かべ、歌にすることはあっても、それを彫刻するということはしなかったように。それやら、後ろ姿の絵に総てを語らせる

とか。真っ正面からぶつからないで、イリュージョン（幻想）を貴重とすることに親しみすぎて、いざサイエンスを語る段には、そうした言葉がもはや不適になりつつあるのを感じざるを得ない。けれど言葉っていうものは、創られるものだから、今後私たちが育ってゆく際に、考えてゆかなきゃならないと思うわね。ではいずれ又。 チズより



1973年3月9日

マコへ

今日、3月9日にやっと長い間待っていた答えが出ました。【タヴィストック・クリニック】の児童セラピー・コースのチーフでいらっしゃるミセス・ハリスという方にお会いしました。



彼女の話をつらぬくと、こういうことです。つまり今年の10月から1年間、夕方週1回開講される講座の研修生になるということ、そして来年の10月以降にはフルタイムの研修生 (fulltime-trainee) になるということなのです。というのは、trainee の数をひどく制限しているの、たくさんの人がチャンスを待っているとのことで、今年の trainee は既に決まっています。つまり私が今年はパートだけど、来年はフルタイムの trainee になるということが約束されているように。但し、個別のスーパーヴァイザーを希望すれば紹介してもらえとか。また、講座の席でケースレポートを発表できるとか、一応身分の保証やら研究の援助の保証は得られるわけです。

それから、ミセス・ハリスが、現在【タヴィ】の訓練生でもある先輩格の或どなたかを私のためにいろいろと援助やアドバイスしてくれる人として紹介してくださるとお約束をなさいました。＜取り敢えずは味見して御覧なさい、食べれるかどうかね・・・＞って言われたみたい。ごもっともよね。

3月の末か、4月の初めに養護施設に勤めますし、さぞかしおそろしいロンドンの問題児に出会うことでしょうが、職員としてのプライドを持ってやれることですし、身分の保証は、ガッチリしている様子ですし、頑張っと思うてます。どう思う？ 私は、これ迄本を見ながら、子どもを見ていたのだったけど、何もかも忘れて、子どもの世話やお話し相手になるというのは、何かとてもいいように思えます。今の私はまるで頭がボケちゃった！ 難しいことは何も言えない私になっちゃったけど。何もかも知ってるかのように振る舞わなきゃならなかった（専門家の）昔と比べて、こうした一時期もいいかまって内心思ったりしてます。

但し、インタビューの後、道を歩きながら、泣けて泣けて仕方なかった。可笑しいだろうけど、今年の10月から4年経てば、帰れると思ってたのに、又1年加算されたことになるでしょ。すごくショックだったの。今なお、甘えっ子です。それでも気を取り直して、街中では他の人と同じように、フンとした威張った顔して、まるで「私はあなたに何も期待しないから、私にも何も期待しないで下さい！」ってな顔して歩き始めました。ニコッとししないでね。まるで大都会というのは、そんなものです。だからやっぱりいつまでたっても、‘日本恋し病’です。毅然としてるのも悪くないけど、むしろ神経がタフになって、感じる心を武装して生きてゆくのかと思うと、まいるな！

それでふと気づいたんだけど。驚いたの！ ミセス・マーサ・ハリスって、ナイーヴな方よ。よっぽどガッチリしたおばさんかと思ったら、私も昔、初対面の人と話すときは、ちょっと緊張して吃ったりしたけど、彼女、終始優しい態度だったけど、途中でちょっと話し方が崩れたので、あれって思ったの。ここは、フンとした顔でつぶって生きてゆかなきゃなんない世界とは無縁な、別世界なのだと思った。相手に寄り添って、一緒に大丈夫かな、どうしようねって悩んでくださる雰囲気があるの。【タヴィストック・センター】は、外見もガッチリしたモダンな建物だけど、中はひじょうにいい感じで整備されていて、また廊下を擦れ違う職員がどなたも洗練された物腰で、やっぱり安心感を抱けるものでした。本当に願わくば、ごく‘高級’に生きてゆきたいものです。感じ入りました！

今は何もしたくないって思うの。いけないかも知れないけど、やっぱりそれだけ気持ち的に悶々とする事が多々あったりしたからで。デボラやらジャッキーやらお世話してきた子どもらのことも懐かしいというより、もう責任を逃れて、ホッとしたい思いなの！ デボラのことはスピーチ・セラピストにバトン・リレー出来たわけだし、後顧の憂いなしということにして、過去のことは、もうサヨナラだわ！ 今の私は、勉強（英語）に専念し、公園を散歩したりして心を慰めています。目下 Hostel 暮らしなんだけど、すごい多国籍というわけよ。中国人の女の子たちと仲良しになったのだけど、彼女たち、凄くタフでもう参った参ったってところなの。喝を入れられる感じ。又いずれお話するわね。 チズより



.....



1973年3月23日

マコへ

遠く離れているってことを強烈に感じる今日この頃です。日本にいた頃は、休暇が取れさえすれば、まっすぐ家に戻っていたでしょ。今、ホステル暮らしで一息ついてるところだから、毎日毎日休みなのに、家に帰れないので、そう簡単に帰れないのは当たり前だけど、我が倅なのか、どうも我慢できずにイライラ腹が立ってくることもあるの。日本に帰ったとしても、何もすることがなくて、退屈するに決まってるのに、ただ帰りたい帰りたいって、まるで駄々っ子みたいです。昨日初めて日本の食事を恋しく思いました。就寝時に見る夢ではなくて、バッチリ白昼夢なんだけどね。舞鶴の家で家族皆がテーブルを囲んで、眼の前のごちそうをパクついているのよ。確か、出発前の家族団欒の焼き直しみたいなのでした。まったく未練がましいわねえ。

それから、ついでに夢のことだけど。おかしなことに、よく外国へ行くんだ行くんだって頻りに息巻いてて、特に何というスケジュールもなく、ただ夢みていた頃のことを夢みて、目覚めた後で、ああここが英国で外国だったのだから、よくもまあ来たもんだなあとか、今になって驚いているようなことがあります。それから、いつぞやスイス人で双子の女の子たちと友達になった話をしたけど、折々に彼女らの寮に気分転換によく訪ねて行ったのね。夕暮れ時には必ず彼女らの部屋にキャンドルの燈を灯すの。故郷での風習そのままに。そんな夕べのひとつ、ヘレンが、＜見る夢がおかしいのよ＞って私に話してくれたんだけど。遠い昔(子どもの頃)引っ越した家(全然特に何という重要な意味もないんだって)のこと

ばかり夢見るって。外国に来て‘自我同一性’の危機を感じていて、遠い過去に遡り、自分を探り当てているのかなって思いました。

ところで、この頃は、次第に日の光が暖かくなり、公園で寝ころべるようになり、春が来たのが本当に嬉しいです。公園の緑の芝生にクロッカス(黄、紫、白)が群がったり、道路沿いに黄水仙が咲いているのをよくみかける。そ



れに、テムズ河にはボートがあちこちに浮かび始め、水鳥もクワックワッやっていて、まことに外国の(英国の)風景もいいもんだなと思ったり・・・ところが、そんなこととは別に心の中で頻りに考えていることは、心底人に出逢いたいということ。



この頃はしみじみとここが自分の属する世界とは別の世界だと感じちゃう。

自分と同じ種類の人間たちと暮らしたいと思う。深刻だよ！

その一方で、【英国博物館】やらその他、結構あちこち観光して回ってもいて、近くの図書館で本探しにもエネルギーを注いでいます。『子どものファンタジー』という20年以上も前に出版された本、メラニー・クラインの感化を受けたソーシャルワーカーと保母との共同出版(10年以上もの実践の成果なの)には感激した！何かを語らねばならないと悟る者は、それを使命として語らねばならないのだけれど、決して急いではならないんだね。辛抱強くやることの気の遠くなる思いです。いずれ又。 チズより

.....



1973年4月17日

マコへ

お元気でしょうか？ この2週間あまり、お母さまからも音信不通になってるので、たぶん私がもうそろそろ養護施設に勤める頃だろうし、住所が変わると思って、おそらくたよりを控えているのでは思うけど、何か事故でもあったのではないかしらと家族のことを心配してます。

驚くやろけど、実は私はまだホステルに滞在しています。「労働許可証」の認可があるのに6週間ぐらいかかるって言われた言葉を間に受けていたけど、あれやこれや人の話を聞くと、軽く2、3ヶ月はかかるとか。ロンドンという所は、それ程に人(外国人)が多く、そうした関連の事務処理量というのは龐大なものやろけど、待つ身のことなんててんで考慮しないやり方に憤りを覚えます。ここの国の人間は仕事熱心じゃないからね。絶対に急がないのには呆れます。

それで私の方も、毎日毎日待っているだけでは退屈だし、今週からいろいろとパートで子どもの世話を引き受けてやり始めました。実にいろんなことがあったからでもあるけど、要するに、慣れない土地で慣れないことをしたツケなのか、些か強迫神経症に近い状態だったの、ベンハム家を去る頃からね。未来が崩れてしまうような錯覚に悩まされて、人に話しても誰も誉めてくれないことだし、一人で自分の回復を祈ってました。このホステルで一ヶ月くらい過ごした頃から次第に自分を取り戻して、ちょっとは逞しい自分になったかなって、取り敢えずこの収穫を今では喜んでいます。終わって気持ちに整理が付けば、過去のことも、大して苦しかったと思わ

ずにすむものだね。子ども相手なんてもうたくさん、とても出来そうな心的状態じゃないと思っていた時もあったのに、今ではてきぱきとかつ楽しく役に立ってる自分を眺めて、随分成長したなと内心ホッとした思いであります。

やっぱり子どもはいいわねえ。18ヶ月のジャスティン(男の子)を週3回、午後3時間ほど遊んでやるの。楽しいんだよ。それに夜ベビーシッターしたのは、4ヶ月のアレクザンドリアという男の子。おっかなびっくりミルクを与えたり、未熟児で小さいのだけど、一時間近くも抱いてやっていると腕の重みを感じて、サッチャンもこんなことをやっているんだろなああと懐かしく思い出したりしてました。ジャスティンのお母さんのミセス・グレンジャーは、オーストラリア人(ご主人はフランス人)で、おっとりした人で、融通性があるので、緊張することも全然要らないし、本当に助かっています。人の出会いというものは、おかしなものだね。本当に人を選ぶということの重要性をしみじみと感じる今日この頃です。気が合うとか、信頼できるということの何と稀有なことか。アレクザンドリアのお母さんは、ベルシャ人です(ご主人は、ギリシャ人)。たぶん私より若いやろけど、それも又実にのんびりした方で、全然こだわりのない。まあ行きずりの大した関係とも言えないにしろ、ちょっとでもイヤーな人のために働くのは厭だし、ラッキーだなんて有り難く思ってます。

今はその2つが私の稼げる精一杯なので、最近お母さまにお金をねだったの。タダで私のために金を惜しまないのは両親だけだって、この頃しみじみと申し訳なく思います。こんな年になって両親に金をねだるのはやっぱり恥ずかしい。とは言え、精神的にまいってダメになっちゃうよりはいい。自分をあまり追い詰めないようにと、あれこれ慎重に考えているところなのです。

ところでお母さまから聞いたかも知れないけど、ついこの前【タヴィストック・クリニック】から正式の入学許可証が来たのよ。それもメイン・コースの第一年生のだよ。第一年目は、セミナーその他、主に夕方なので、イブニング・コースの受講生になるのと変わらないとは言っても、正式にフルタイムの訓練生の第一年目として迎えられとはひどく光栄で、あまりに話がうますぎて、驚いています。セラピストとしての第一級の素質はあるとは言え、英語力も十分じゃないし、読んでいる本とか、その理解力とか、その開きやらは他の訓練生たちと比べれば随分大きいやろなと思うけど。人がかかる年数を越えても構わないしと思って、リラックスしてかかろうと思ってます。成熟には時間を掛けなきゃね。家族の者に信じてもらうために、【タヴィストック】からの手紙を同封しました。両親に一度見せてあげて下さい。これからかかるお金のことは、子ども相手の仕事だけに、必ず経験が金になるように思えるし、考えて悩む程厳しいものじゃないだろうと、この頃では腹を括った。やれるまでやろう、どうしてもダメなら、経済的に挫折するということもあり得るかも知れないけど、そこは何年も掛けてもいいと思えば何とかなるような気がしてるの。「労働許可証」のことは、情勢判断ではもらえるものと信じているけど、もらえたら実に儲けものだよ。(一番難しいケースだよ。公務員になるのだから。) もしもらえなかったとしても、やっぱり今の生活続けるとか、方法はあると思ってるわけ。中途半端で日本へ帰って職探しってのはしんどいし、ここでトレーニングを受けるチャンスを絶対に逃したくないわけなのね。

これ迄まったくよく辛抱してきたものやと我ながら感心しています。ここのホステル暮らしでいろんな女の子たちをみていて、いろいろと学ぶこと多いの。イギリスという国の懐の深さという

ことなのかしら。それぞれがここでチャンスを掴んで、祖国に戻り一旗上げるといった気概と野心を育てている。彼女らに私も負けられないと、いい意味で煽られたとも言えます。それに何と言っても、毎日毎日英語ばかり使っているし、この頃、あまり英語で話すのも不自由しなくなったのだよ。でもまだまだと思って、勉強に励んでいます。さて、ここに新聞の切り抜き(LSD をお菓子と誤って食べた男の子の話！)を同封します。興味深いと思ったもので・・・。

それからお願いしたいことは、何と言っても、あなたが私のこと一番よく承知してくれてるのやし、両親に解ってもらうのには、あなたの協力がこれからも是非とも必要です。極力彼らに心配しないように話を時折してやって下さい。いろいろ話したいことは、たくさんあるのやけど、遠いわねえ。いつかイギリスへおいでよ。私は当分帰らないのやし。ほんととても会いたいです。

ではいづれ又。 チズより



1973年6月15日

マコへ

ご無沙汰致しましたが、お蔭さまで養護施設【ホリス】に赴任し、すべて快適に順調にいます。まるで気持ちもリラックスして穏やかになってますし、日本から今着いたみ



たいな、去年一年間のことがウソのようです。そのうち写真を家に送りますので、いづれ様子が解ると思いますが、

ここシドカップの環境は抜群にいいし、スタッフたちもいい人たちばかりです。我慢することとか、嫌な思いをするということがまるでありません。今のところは、ただアシスタントとして他のスタッフのやることを見ている手を出すといた程度です。やらなきゃならんという切実なこともないので、適当に皆それぞれがそれぞれのことをやっているという具合です。お茶の時間が長いです。よく飲むのには閉口します。紅茶をそんなやたらに飲むようには出来てないもので…。でも余裕があるというか、誰もがお喋りに花を咲かせて和気藹々といったところ。聴いていて、いい耳の訓練になります。私はこれからここでスイミングとビリヤード(玉突き)を上達させるつもりです。詳しくはいずれ又。

チズより



1973年7月10日

マコへ

その後音沙汰ないけど、どうしてる？お母さまの便りで、あなたの論文が本になったって、聞きました。とにかくおめでとう！よくやったなあとお拍手喝采です。こういう仕事って、なかなか認められるってことは難しいものね。特に秀でているとしても若いとね。あなたが順調に日本で活躍しているって、やっぱり嬉しいです。

私の方は、仕事おもしろいよ。アシスタント・ハウス・マザーという立場なんだけど。サイコセラピイの必要な子どもばかりみたいなのを、日常世話してるでしょ。どういうニーズがあるのか、逐一解るわけ。あの子にはああして、この子にはこうしてと頭の回転をよくして、ピッピッと、感受性を磨いていってるわけ。私、随分と成長してるみたいよ！

例えば、12歳の女の子。ひどくうつ的、ポップ・ミュージックにかじりつきり。彼は全然無関心で、私たちにしかめ面をしたり、ひどく扱いが難しくって、どちらかというと嫌われ者だったんだけど、この頃、妙にニコニコと嬉しそうな笑顔をするようになって、昨晚室内でだけど、他の子とクリケットして、ボール追いかけているじゃないの！びっくりした。その子に私の日本で買った上等な赤い服あげたのだけど、よく似合ってたよ。その子いい服全然もってないの。その他、いろいろ折り鶴を他の子につくってやったり、写真を撮ってやったり、私は優しいです。皆に公平に優しくしてやれば、子どもは落ち着いて、穏やかになるものです。悪ふざけ過ぎれば、お尻をバシんとひっぱたいてやるけどね。スタッフは、いろいろと学ぶことの多い人たちで、英国風の躰け方ってのは、日本と違うし、感心してみています。おっかしなことに、子どもが悪態つけば、他のスタッフは、バシんとひっぱたいて、ベッドへ送りこむのだけど。私、悪態の意味もなにも解んないものだから、ただニコニコしてるの。私がいつもニコニコしてやってるから、何人もの子どもは、私の顔見れば、クッククックって笑えてくるという具合になって、何ともトンチンカンながらまるで愉快なのです。

養護児童施設【ホリス】は小舎制で大きな屋敷内に十幾つかのコテージがある。私はその幾つかを回ったことになるんだけど。変な話だけど、『シダー』の家のハウス・マザーがひどい曲者なの。彼女の一家が同じ家屋に一緒に住んでいるんだけど。差別は著しいし、仕事はいい加減だし、子どもらも他のスタッフもひどく害を被っているのだけど、何しろ口がうまいので、誰も彼女以上には出られないのね。経理は彼女が一手に握っているので、不正を調べるわけにはゆかないのだけど、どうもくさいのよ。私、【ホリス】の

統括責任者になっている人に手紙を出して、事情を話して、別のコテージに変えてもらいたい旨、願い出たの。彼はひどくフェアな人物だし、何とか対処してくれるでしょう。英国人の中で暮らすって楽じゃないよ。だけどここには常識ある人がいるから、まだ助かる。

ところで私今、自閉症の子どもの本読んでいけど、あなたの論文を船便で送ってくれるかしら。是非お願いね。 チズより

.....



1973年7月19日

マコへ

久しぶりにたよりをいただいて、あなたの身辺にも、いろいろと変化が起こり始めているのを知って、人の世をしみじみと想う今日この頃です。やっぱり日本が今でも尚なつかしいです。帰れば、どんなにホッとした気分になれるやらと思ってます。私の方は、一応落ち着いた恰好になって、生活を楽しむ余裕も出来、実際ここまで来たことがまるで夢のような気がするのです。けれども、自分の国から遥か遠いという心細さは、ふとした時に感じずにはいられないのです。ある夕べ、スタッフの寄宿舎『オークス』の家でテレビをみながら楽しくお喋りしていた時、翌日にそこが結婚式のパーティーの会場になるという話題になってから、ふと落ち着かない気分になり、外へ出て歩き始めたら、カーと熱い涙が眼に溢れて止まらなくなったりしたの。サッチャンの結婚式の時のことを思い出したわけ。やはり平静さや朗らかな気分を保っているのにはかなりの自制力が必要わ。この国でうまく適応してゆくのにかなりの時間が掛かるし、どこまでも心底から好きでいつまでも居たいとは思わないだろうって気がするのです。個々の経験云々という以前に、突き詰めれ

ば、そこにはやはり‘精神的土壌’の違いというものがあるのです。ただ、私の場合は、性格的にというのか、育ちの良さ(?)というのか、どこか人に感心されるような、子どもには何かホッとされるようなものがあって、どこに行っても何となくいつか好かれていたという具合になるので、別に案ずることもありません。ただ、自分がこういう状態にいただけに、常に不幸な思いをしないように、自分で自分の心身の健康管理を怠らないようにしなくちゃなりません。従って、『シダー』の家では、あんなでたらめなやり方では自分もでたらめな人間になるような気がしたし、そういうハウス・マザーはどうしても許し難い気がしたので、統括責任者に移転願いを出したのですが、私は今、その Mr.シンクレアの奥さんがハウス・マザーになっているコテージに移動しました。

【ホリス】内で職場が移動になったといっても、自分が寝泊りするところは『オークス』といってスタッフの家で、個室が与えられてますし、そこからの通いになります。そこで折々に若い者たちが集まっていろいろ内輪の愚痴話をするわけ。どうやらこのコテージも何かと不都合な状況にあり、まるで一体どういうわけでそんな風なのか、理解に苦しむのだけど、結局のところ、スタッフの人間性・品格が低いというのか、情緒性に劣るとしか言いようがない実態が窺われます。新聞によると、個人経営の英国の養母の80%が不適格者なんですよって！どうでもいいような風に育った子どもたちが集まっているのが【ホリス】なわけで、彼らを世話するはずの人間たち(ハウス・マザー、アシスタント、その他にも掃除人や料理人)がどういう生活態度を善しとするかで、コテージの雰囲気が決まるのだけど、実際にどんな風にでもなるわけなのです。政府からの補助は今のところ潤沢というわけだから。

弱者救済という名目はその通りだとして、誰が誰を食い物にしているのか、此国の成り立ちは微妙に錯綜しています。かくいう私にしても、この【ホリス】に‘寄生’してると言えなくも無い。

今私が勤務してる Mrs.シンクレアの家では、20名以上の子どもがいて、その団体生活の指導の厳しいのには定評があるのだけど。私は始めびっくりして、スタッフが怒鳴りつけると、子どもたちがシーンと静まりかえるのを、ただ恐れおののいて眺めていたけど。実際に彼らの育った環境の悪さからして、人並みの常識のある態度を身につけるためには、相当の‘枠組’が必要なのだということを知りました。ただ、いつもビシッと真面目な顔ばかりしてるのが子どもじゃないわけで、笑ったり、おかしなことが幾つかあってもいいわけで、私は出来るだけリラックスしています。そこらへん英国人は下手なのです。とにかくそれぞれが(大きくて【ホリス】に来たような子は特に)それ迄の荒くれた雰囲気があって、日本人同士(大人と子ども)のように、信頼しあう関係をつくることは、容易ではありません。特に黒人の子どもは(他の人種と交わってないけばいいだけ)気質が生来的に荒くて激しい(自制力に劣る)のです。スタッフ・ミーティングでも、一人ひとりの子どもの難しさを詳細に述べあって、その取り組み方の真剣なのが解りますし、まあ今のところ批判するのは止めて、様子を眺めていようと思ってます。そんないろいろな経験の中で、セラピストというものを改めて考えるに、何とまあ楽な仕事かとふと呆れる思いがしたのです。四六時中世話している者のその子どもへの思いというものを、私たちセラピストはもっと、尊重しなくちゃならないと思ったのよ。

この前或る事で、【タヴィストック・センター】の或る教官と会った折に5分間だけちょっと

『シダー』の家の女の子(12歳)のことで質問したわけ。いつも寝る時間の前、お腹がすいたって訴えるのだけど、スタッフはただ意地汚いだけだと言って、ノーって言うのだけど、私が見て、そうとも思えないし、どうしたらいいかって訊いたら、くよくよ子どもの養護施設では十分な食物をあげないということがあるし、たぶんその子も本当にお腹が空いているのかも知れない。けれど寝る前になるべく一緒にいてやって話してやってみたら・・・。本当はそうした接触を食物以上に要求しているのかも知れない・・・>って、彼女言うので、その言い方がひどく思い遣りのある優しい言い方で、なる程と私も感心したの。だけど、実際に私がやったことは、缶入りのビスケットを買って、その子に内緒で手渡し、交渉したわけ。お腹が空いた時は、これを食べて他のスタッフとは悶着を起こさないように。今後お小遣いで少しずつビスケットを買って、缶の中に入れておくようにってアドバイスしたわけ。その子、少々いい加減なところがある子で、何にも無関心で、時には人をバカにしたような拗ねた風なところもあったのだけど、私とは真面目に話す態度になっていたの。残念なことに『シダー』の家を私が去らねばならないことになって。全くいろいろと悲劇があるわけだけど、誰も気づかない中で、子どもはどうすれば傷つかずに済むか、どうすれば安全かという勘所を身につけていっているという思いがします。毎日毎日の中で起こる様々なことの積み重ねというものの重みを私たちサイコセラピストは改めてずっしりと感じる必要があるように思われる。

ところでふと気がついて愕然としたのだけど、ここの【ホリス】のスタッフたちにしても、私のように教育を受けてちゃんとした家庭に育っててっていう人は他に誰もいないように見受けられるの。呆れるような事実なの。別に軽蔑して

言っているわけじゃなくて、階級社会の歪みということなのかしら、教育水準が低いとか貧困家庭が背景にある。一般に労働者階級の家庭のあり方の貧しさ・でたらめさってのはもうお話にならないの。親などそもそも最初から全然当てにならないわけ。それでもちょっと気概があって、高等教育を受けて資格をとろうって野心があるような人が【ホリス】にもいるわけだけど、飽くまでも自力で活路を見出している。【ホリス】は通過点でしかない。経験が重視される職種、例えばケースワーカーを目指す人などにとってはここは悪くない。ここで働きながら、イブニング・コースに通っている人がいる。タヴィストックに限らず、イブニング・コースはだから盛況です。教育資金は常に自分で貯めてということだから、彼らの人生は苛酷です。私の状況に比べると何だか悪いような気になったりする。いずれ【タヴィストック・センター】で2、3年後にはそれ相当の教育を受けた、恵まれた階層の人たちと交わることになるはず。私の今の状態は何とも説明の仕様の無い‘宙ぶらりん’です。でも、ここで見るべきものは見たということにしないでほしいわね。『シダー』の家にいた折に仲良くなった、22歳の結婚している女の子キャシーに親切にしてもらってる。彼女、ケヴィンと共稼ぎで慎ましい暮らしだけど、とても頑張りやさん、すごく大人なの。今後彼女から、英国のこと、子どもの歌やゲームとか、それからケーキの作り方や、ギター等を習うことになっているの。欲張ってるでしょ。でも能力は‘力’だものね。私は大いに欲張って、‘力のある女性’になろうと思ってます。夏といっても、こちらは雨が変にシトシトと降ったり、肌寒かったりします。日本の夏の蒸し暑い夜の風情なんてありません。日本人の浴衣掛けていいもんだなあなんて懐かしいです。どうぞお大事に。 チズより



1973年11月26日

マコへ

おたより、ありがとう。上高地へ行って来たんですって。懐かしい話を聞くじゃないの！私、生活が落ち着くにつれて、帰りたい帰りたいって、子どもみたいに泣きじゃくるってことはなくなりましたけど。どこかで、今現在生きている空間から私という存在が漏れるというか、何かの折りに他人のコトバ(英語)を聞くのがうっとおしいような、面倒な気がして、聞いてない態度になっちゃうことがあるの。独りで自分の部屋にいと、英語の文字を目で追いながらも、頭の隅に日本でのいろんな記憶の断片が勝手にヒョイヒョイと出てきて、それが慰めになったりで、そんなことがどうも英語上達の障害になってるんじゃないかという気がして、どうも落ち着きません。

要は、自分の生活を肯定できること、一緒にいる人間を肯定し、その交わりを喜べることなのでしょう。いつの頃からか、そうした場を求めてきましたが、ついにその日がやってきた感があります。つい先日【タヴィストック・センター】のチャイルド・ガイダンス・トレーニング・センターのデイ・ユニット(Day Unit)で、アシスタントの空席をみつけて応募したところ、意外に早く返事をもらって、来週の金曜、そこを訪れて、その人たちといろいろと話し合うということになってます。仕事の詳細についてのパンフレットも送ってもらったので、どんなのかイメージを持てたけど、ひじょうにおもしろい企画なのです。問題をもった子どもが通ってくるわけだけど。取り敢えず私はグループ・ワーク担当。とにかく仕事の内容からして慣れるのに日数がかかるやろし、初めから一人前にやれると考える方がいいだろうけど、慣れた

らきっと楽しいやろうって思うの。仕事の時間は、9 時～5 時ですし、土曜・日曜は休みなので、本当にホッとしちゃう。でも自分が日本人だからってのも無視或は疎外されるって強迫観念が少しあるんだよね。インタビューとなると、ついそんな気持ちがかアーツと出てきて、落ち着かなくなるんだけど。今までの経験で、自分らしくして、それでいて認められないなら、その職場で楽しくやれるはずないし、こっちでお断りだって、強気になることにしました。でもタヴィストック畑の人間はひじょうにいいです。そうした私の繊細な感情を病的にさせないでくれるし、安心していいと思います。たぶん1月になる迄に、【タヴィストック・センター】の近くの下宿先を求めて移るやろうと思います。そうして落ち着けば、今までの長い苦しかった道程を一つに纏めて、笑って闇に葬れると思います。

ところで2週間に1回、プライベート・スーパービジョンを受け始めています。ここの養護児童施設での体験を咀嚼し、より吟味するためにぜひとも援助が必要だと考えたからです。【タヴィ】の若手教官の一人、マーガレット・ラステン女史ってのはひじょうに頭脳明晰で切れるタイプです。彼女のコメントは一々さすがだなあと感嘆することが多いです。ただ彼女の話す英語がその構想力においては勿論ですが、語彙も極めて高尚というか、時折私の英語力ではフォローしづらい。私の英語力に合わせて、難易度を低めてお話するということをお断りして、自然日々の子どもの観察にも気合が入り

ます。そうしたことで今のここ【ホリス】での生活がよりいっそう意味のあるものになってきていると言えます。誰かに支えられて成長を励まされているといった感覚は幸福以外の何ものでもないとの思いを強く抱きます。

あなたの方もどうぞ Good Luck でね！では、いずれ又。 チズより



1974年1月30日

マコへ

先日は、あなたの論文をいただきまして、大変感銘を覚えました。私は、特に自閉症児のことについては専門というわけではなく、これ迄も熱中して興味を注いできたということはありませんので、従って世界的或は日本においてこうした特殊児童に関する理解というものがどの程度なのか知りませんが。あなたの論文では、あなたの理解度の深さが自信として窺われますし、その内容は経験に支えられて、ひじょうに無理のない、女性らしい繊細さもあり、大変結構なものと思われます。

とにかく、ああした子どもと接していると、その混乱している世界にセラピストが巻き込まれ、現象の筋立てを見失い、まるで何が何だか解らなくなりがちですから、セラピスト側の絶望感・無力感というものはひじょうなるものと思われます。あなたのように、まずは解ろうという姿勢を、そしてここ迄私は解ったのだという自信を論文にして示したということは、そうした人々にとって大きな救いになるのではないかと思います。

ところでつい最近、「エディット・ピアフ」というフランスのシャンソンの大御所的存在だった人の伝記(実妹による記録)を読んだのよ。

道端で生まれ(本当に！)、道端で育ったというわけで、まずまずきちんとごく普通に育った私などの感覚からはちょっと目を覆いたくなるようなことの数々で世を去った人でしたけど。その歌唱力の器量もさることながら、その伸びることへのあくなき熱情ってものはズキーンとする程なのです。ノミ・虱だらけの道端の歌を、超一級の紳士淑女の集まったコンサート・ホールへ申し上げたということは、クラス(階級)という差別意識のもつ底知れぬ‘抑圧’を思うなら、それは尋常ではないことだったのであり、しかもクラスの上的存在に成り上がってさえ、自分の過去を(酒に、売春にetc)、つまり下層の人々の人生をあくまでも肯定しつづけた(それはとても大変なことなのだ！)ということは、ピアフのピアフたる所以であり、そうだからこそ、彼女は今尚そしていつまでも、民衆の中に一つの‘炎的存在’として生き続けるものと思う(これといって誇るものも肯定するものも何も持たない民にとって・・)。

まあ、そういうわけだけど。一つ興味深いことは、ピアフはいつも歌を選んだということ。常に自分の歌を書ける作詞家をひじょうな熱意で求めたということだわね。つまりは、歌を歌うということは、ピアフの存在の中から湧き上がるものとしてあらねばならないという信念があるからで、その晩年に後輩を育てることに興味を持った折りも(特にイヴ・モンタン)、まずその人となりを解ろうと努め、その人の中から出てくる歌を探し、そして選んだということです。何か、ほらね、昔からあなたが言っていた(私も共鳴していた)＜自分の中から出てくるもので、勝負してゆこう＞という姿勢に通じるものであるからして、国籍やら生い立ちの違いを越えて、我々は同志になれるというわけなのです。そうした者の生きる道程というものが厳しくも辛くもあり、又傷つき果てて、時に

は相手を傷つけてという、傍から見れば実に破天荒なんだけど、自分であることに曇りのない自信を持っていれば、おそらくその存在は、混迷しているこの世界において、一つのオアシスの意味を持つということを忘れず、心細くも自棄にならずにいたいものです。

さて私の方の近況ですが、既に予告してありましたとおり、やっと落ち着いて勉強に専念できる環境をついに得たと言えます。【ホリス】を退職後、ロンドン市街のど真ん中に引越しました。かの有名なシャーロック・ホームズの住まいのほん近くだよ。街の景色はまさに当時そのままに威風堂々です！地下鉄が Baker Street 駅からだから、【タヴィ】は勿論、どこへ行くのにも地の利は抜群です。フラット flat は、ジーンという英国女性が仕切ってるわけだけど、他にもう一人、ニュージーランド人のアンジェラが同居しています。それぞれの個室があり、共有のキッチンとバスルーム、さらにかなりのスペースのくつろげる居間もあります。とにかくやっとこさでホッとして生活できる自分の居場所を確保でき、内心とても深く安堵してるのです。

実は、今日初めて日本人の社交クラブ(『若竹会』)というのに出席したのですが、何と英国人が大半で、日本人はごく僅か、むしろお客さま的存在で、私は日本語をしゃべりにゆこうかと思って出掛けたのに、結局まるで英語ばかり・・。フィルム上映があり、「鶴と少年」という北海道の風景にちよこり子どもの描写といった内容の軽いもので、綺麗だったよ！それでお菓子をつまんで、オレンジジュースを飲みながら、それでも結構‘仲良し’的雰囲気であつたの。それで私は、アイリーンという女性ととても有意義なおしゃべりが出来たというわけ。東京で2年、

日本語の個人レッスンを受けたっておっしゃってた。詳しい素性は解んないけど。私もここでの滞在が1年半過ぎて、どうにかやっと会話の間の取り方とか、つなぎ方を会得して、それにこっこの事情にも通じてきたし、社交界へのデビューの準備が出来たといったところね。とにかく場数を踏むということの重要性、新しい人・新しい場면을怖がらず、リラックスして、すぐ誰とも気楽におしゃべりが出来るという風になるのは相当心的葛藤があったんだから、まったく大変でしたよ。

単なる社交の場ではともかく、【タヴィ】のコースでのセミナーではかなりまだまだ討論に加わるのには時間が要すると思うけど、大体様子が解りかけて、少しずつ余裕が出来つつあるのです。いずれ又、詳しくたよりするけど(もう書くのがちょっと疲れたので...)。現在の無職の身分では、何とも時には大きな溜め息(あるいは深呼吸)をも吐きたいような...。それでもやらなきゃ、やってゆきたいという熱情はどうかあり、かなり慎重に未来の設計を立てているところです。とにかく今しばらくは幼児教育(3~5歳の普通児)の現場をあちこち観察に出掛けてみたいと思っているのよ。まるでおかしな具合よね。誰も試みてもみないようなことを、一人で考え一人で歩んでゆくのだものね。だけど、まあ、私、少しずつ貫禄というか、余裕というか、落ち着きというか、自信が身に付きつつあるみたいです。

さて、あなたの方、転職の件は慎重に考えているみたいだけど、もし変わる見込みが付いたらば、休暇を取って、一カ月程こちらへ来ませんか？ここのフラットに泊まれるし。どうかしらね？一緒に旅行もいいし。考えてみて下さる？

ではいずれ又。 チズより

.....



1974年3月7日

マコへ

おたより、どうも有難う。京大の頃の教育学部の研究室のかつての仲間たちのことや、森野先生やら鑪先生のこと、とても懐かしく思い出しておりました。あれから随分と遠くに来たもんだと、感慨を抱きながら...

ところで先日、【タヴィ】の「乳児観察セミナー」で、私初めて発表したのだけど。なんというか、えらく沸きに沸いたセッションだったのです。皆が皆、なんというか、私の私らしさとか、文のうまさ(?)とか、ひじょうに感激されて。確かに、ミセス・ポロメイヤ(ペピーの母親)って、ひじょうにユニークな人柄の持ち主ではあるんだけど。本当に稀に見る出来栄えの発表だったらしく、終わったあと、皆に一斉に拍手されたんだよ。そんなの初めてだ。皆から感謝されたり、褒め言葉をわざわざもらったり、えらく私としては面映い思いをしたのです。セミナー受講者は、殆どが35歳以上の中年の相当な学歴と経験の持ち主ばかりなのです。そんな中で、一見おとなしい、可愛らしい東洋からの女の子の私が意外と傑出した才能のある人物だということを示したようなことで、教官のミセス・ハリスを始め、誰にも皆驚きだったようなのです。その2週間前は英文タイプ出来なかったのに、タイプライターを購入し、頑張って16ページもの凄いレポートをどうにか仕上げて、皆へコピー配るのに6時間も掛かったというバカげた話だけど。しっかりとやるだけのことはやれたと、ひとまず満足してるところです。

就職の件の方は、話に白黒が付くのに、あと1、2週間ほど掛かるという具合なのです。

今日、ミセス・ハリスの紹介で先輩のミス・ハーパンに、或る病院での自閉症児の観察を勧められたのですが、それはもちろん報酬は無い話なのです。家の方へ送金依頼を出そうかどうしようかと悩んでるところ。いろいろと将来のことも考えているの。心配掛けて気を煩わせるかと思ひ、今のところ家には全然たよりを書く気にならないのです。宜しく言っておいて下さい。

【タヴィ】って、セミナーの一年生ぐらいでは感心しない人がいなくもないけど、さすが4年のトレーニングを終えた方たちってご立派なのです。皆個性的に‘美人’です。少しずつ【タヴィ】に属しているという感じを抱きつつあるのは嬉しい限りです。

ミセス・ラスティンにお願いしていたプライベート・スーパービジョンだけど、来週で打ち切ることになっています。お陰で養護児童施設での体験もますます私なりに咀嚼出来たことですし、ここでもういいかという心境になったわけです。さて、次の展開は・・・といったところですよ。そこそこの報酬も欲しいし、余裕も欲しいし、自信も持ちたいし、目下あれこれ思案中なのです。

それから、嬉しいことに、【ホリス】でお付き合ひのあった、ヨーク市在住のイアンとビルジッドという若いご夫婦から「いらっしゃい」ってご招待があったの。ローズメリー（3歳の女の子）にも



会いたいし、お訪ねするつもりです。実にいい人たちなのです。でも、後で一人淋しくなってポカーッとウツ的になるんじゃないかとちょっと心配です。いずれ又。 チズより

.....



1974年4月6日

マコへ

今日は6日の土曜日です。朝の8時過ぎから、こちらで私の身元保証人になってくださってるドクター・カーベル(彼女は麻酔医なの)にご案内いただいて、ケント州というロンドンからずっと南に下がった郊外へ車で遠出をして、ウイストン・チャーチルの住んでいた館やらあちこちの名所を訪れたのよ。気候も良く、そりゃあ愉しかっ



たの。まるで絵葉書そのままの英国の田園風景を満喫したというわけ。実に

久しぶりの豪華版でした。

ところで至急お知らせしたいことがあります。先日【タヴィ】の図書室で、ヒョイヒョイと雑誌論文をみていたのですが、‘Journal of Autism & Childhood Schizophrenia’って雑誌知ってたかな？1971年初版なのですが、その方面での権威であり、おもしろい論文が盛り沢山なの。特にセラピー(自閉症児の)世界的動向が解り、あなたの仕事(論文)の勇気づけとも反省にもなるかと思う。日本にまだ入ってないようでしたら、個人注文をするようにぜひ勧めたいです。とにかく今迄見たことのないのなら、ひじょうな驚きであり、新たに発見することもあり、とにかくあなたが日本で最先端をいっているなら、世界の最高峰にいる人々の考えをも吸収していかなきゃと思うの。それは、日本にいるのでは仕事が出来ないとかいうのじゃなくて、先人の足跡を辿り、それらの業績を消化吸収して、さらに思想を発展させてゆくのは、権利でもあり義務

でもあり、井の中の蛙であってはダメだということなのです。そういう意味で、指導体制下に身を置けば意図せずとも感化なり指導なりをもらって成長しているこっちの専門家に比べ、あなたの場合、特にセラピーに関する限り、孤軍奮闘してきたのだし、その自分の威力に驚くと共に、やはりゆっくりと周りを見渡す余裕を持って、さらに磨きをかけていって欲しいと思ったの。新たな発見があること間違い無しよ。私はちょっと興奮気味！光を求めれば、少しずつでも照らし出されてゆくものと、改めて生きることの妙というか、不思議さに感激したのです。

同じ自閉症児の理解でも、クライン派のMrs. タスティン(Frances Tustin)という方の20年間の経験をまとめた本なんて、私には不可解で要領を得ないものなのでしたが。私の個別指導してくださったMrs. マーガレット・ラスティンという頭の切れる人でさえ、難しいっておっしゃってた。経験の積み重ねの上で、ビシビシとある独特の世界観(理論構築)を創り上げてゆく器量を持たねばならないわね。いずれはそうだとっても、今の下積みの臨床経験を大事にして頑張ってゆきましょう。

では又。 チズより



1974年5月10日

マコハ

元気のことと思います。私の方、第2回目の「乳児観察セミナー」の発表を昨日終えて、今のところ息抜きしてて、明日でも画廊巡りなどして歩いてようかなと思ったりしているところ。下書きにすごく時間がかかって、言葉がどうしてもまだ自由自在というわけにもゆかず、もう厭に

なる程辞書を引き引き、それでも自信がなくて、大変なものでした。それにタイプするのが問題。肩は凝るし、それを又ゼロックスで14名分のコピーをつくるのに金にかかるし。発表終える迄は交通事故などに絶対遭わずにおかねばと、余計に神経張り詰めていたり…。第2回目のこととて、かなりリラックスしていたとは言え、緊張感は絶えず抜けなくて、もう大変。でもちゃんと終わってやれやれといったところですよ。観察報告だから、赤ん坊がああしたこうした、母親がこう言った、ああ言ったってことだけど、私のはまるで傑作なの。時によるけど、私って昔から真剣に場面に打ち込むと、記憶力が途轍もなく、まるで‘ビデオテープ’みたいに実によく覚えてるの。それなもので、その記録は長い長い物語りになっちゃって…。ミセス・ハリスは、いっぱい話したいことがあるけど、どうも時間が足りないの、この次ぎの時は、一週間前にプリントを配って下されば、皆が家で読んできて、後で十分話しあえるので、そうしてくれたら有り難いなんて言われるのよ。私の観察力はともかく、そのミセス・プロメイアというペピーのお母さん、小学校の校長先生してらして、それが何とまあ傑出しているというか、実に面白味のある人物なのです。そんなもので、記録の内容をより面白いものにしているわけで、私はすごくラッキーだって思うの。プラスの意味で皆から好奇心を持たれて、印象深くなる。それで後で、ひじょうにいい報告を出して下さったって誉められるってわけだから、私って、随分得してるわけよね。

何と言っても、【ホリス】を出て以来、この何カ月かの休息と経験(殊に病院と保育園、それに赤ん坊の観察)、そして読書の収穫は相当なものだと思う。グングンのぼりつつあるって、勢いを感じます。これ迄何と言っても遅れがちでどう表現していいやら考えていいやらと戸惑うこと

が多かったのですが、この頃の落ち着きやら自信やらはかなり本物になりつつあります。観察に訪れているのは、St.Thomas Children's Day Hospital というところが一つ。仰山の「Deprived Children」と診断された、発達に躓きを抱えた児童たちを週1回観察してます。それから、Thomas Coram Children's Centre といって、ごく一般の保育園ですが週2回ほど通ってます。2歳頃から5歳までの健常児たちの自由遊戯に参加させてもらってるわけ。乳児観察の方は、ペピのお宅に毎週定期的に訪問してます。すべてが順調にっているし、余裕のある態度で子どもらを見つめています。

知れば知るほどに、此国の問題ってのは、私などのように純日本的雰囲気の中で育って、しかも問題児を見てきた者にとっても、どうもちぐはぐで、呆れてポカーンとして、問題の深刻さ（歴史の歪み）、社会編制のあり方など、救いようがないと怯んじやうことがあるんだけど。それでも、それだからか、ごく少数派かも知れないにしても、徒労感やら崩壊感やらと闘いながら、そうした事態に寄り添い、なんとか子どもらを援助しようと悪戦苦闘してる専門職の人たちに出会う。そうした心ある姿勢にはなにやら感動すら覚える。プロの一人ひとりが社会改革運動家とも言えるわけ。やはり此国には底力はあるよ。私は、家から援助してもらわなきゃいけない、この状況に甘んじてはいけなしいと思ひながら、今ひじょうに恵まれた状態にあるといえます。いろんなこと偶然だけど、私、すごくラッキーなのだね。場所といい、人々といい、ひじょうに得るものが多い。あちらも私に、学ぶものがあれば、ぜひどうぞって感じで誰もが懐が深い。皆とても私によくしてくれる。有り難いと思ってます。そういうわけで今後の展開が面白く、腰を据えてやってやろうじゃないかって態度に変わりつつあります。

何と云っても【タヴィストック】への帰属意識が募ってるのが分かる。それは偏にやはり‘先達’としてのミセス・ハリスの存在が大だと思われる。彼女がミセス・プロメイヤについて印象を語ったのを聞いていて、つまり私、彼女の言うことがそうだ、そうだ、その通りだと思ったのだから、感じてはいたのだよね。それでも、コトバに出来る程自分の中でよく纏まってなかったのに、ミセス・ハリスはやはりよく纏めてゆくよ、その印象を！どうしても感心しちゃう。経験を積むってこと、専門家 professional って、やっぱりすごいのだって改めて感じ入る。キャロラインというアメリカから来た女の子が、＜私、ミセス・ハリス大好き大好きだ。私もいつの日か、あんなになりたい＞って、熱烈に言ってたけど。感じ方が洗練されてゆくってことは、やはり素晴らしいことだと思うの。まだ一年生でしょ。研修生でもいろんな人が寄り集まっているから、その感じ方でもそれぞれゴチャゴチャ纏まりないと思う時あるけど、ミセス・ハリスはスキッとよく纏めて（無理なく）お話をさってるし。私思うに、人が出たり入ったりしていて、セミナーの方も人をわりと気軽に入れているみたいだけど、実際最後まで残る人ってのはごく僅かで、サイコセラピストってのは、この国でもそんなに多くはいない、希少価値ということらしいわよ。何と云っても無事に研修コースを終えるってことは大変なんだって思う。

それでビック・ニュースです。私、ここに来て、えらいラッキーな方向へ行ってるの。セント・ジョージ・ホスピタルで、サイコセラピストの職を得ることになったの。それもミセス・クロカットという私の個人指導教官がそこを去るということで、その後任にというわけ。ミセス・ハリスから話があったのだけど、確かに無職なのは、私ぐらいしかいなかったかも知れないけど、殆どの人がサイコ

セラピストとは違う職を持っていて、誰でもがこのポストを欲しがっていると思うのに、同輩でも先輩でもその候補者になるような人はいっぱいいるのに、私に口が掛かったということがまず不思議なぐらいです。例えばキャロラインは同輩だけど（私よりも若いかも知れない）、2年もここで分析を受けているって。アメリカで1年フロイト派に、1年クライン派に受けていて、彼女のお父さんはアメリカのクライン派の指導的地位にいらしいの。もう一人、ウエンディってアメリカの女性も（彼女、2年生）6年も分析を受けているって。彼女のお父さんは分析医なんですって。そういうわけよ。キャロラインは、Ph.D.の学位をめざしていて、大學で単位修得のため、最近ブレイグランドの子ども相手の仕事を辞めているし、ウエンディは、子ども病院でブレイ・リーダーやら保母の仕事みたいな仕事していて、ちゃんとしたサイコセラピスト職じゃないのよ。ミセス・クロケットは、その病院に4、5年在籍されておいでで、絶対いいポストだって私におっしゃってた。パートタイムで、あまり時間量も仕事量も全然無理のない風ですし、だからセミナーの勉強も何とかこなせそうなわけです。それから3年生になると、普通【タヴィスツク・センター】の中でポストがもらえるのですが、誰にでもやれる程ポストが無いので、他の病院やクリニックの仕事をもちゃんとそのトレーニングの意味にとってもらえるらしい。もうこうなれば、あとは着々といくって感じなのよ。10月にはいよいよ「パーソナル・アナリシス」が開始です。心準備は出来ているし、十分に収穫はあるはずと期待してるところなのです。

もう一つ。ミセス・フレッチャーという【タヴィ】の先輩がお産を控えておいでとかで、或る自閉症児を家庭で面倒みてらして、それで誰か自分の後任になる人を至急探しているんですって。ミセス・ハリスからそのお話が私にあったので

したが、後から母親が、サイコセラピストよりもというわけで、学校の先生やらをご自分で探されたみたいで、その話は沙汰止みになったの。でもこんな具合に、少しずつ研修コースのいろんな人たちと何やかやと繋がりが広がってゆく。知らず知らず【タヴィ】に根付いてゆくような思いがするの。この幸運を有り難いと思ってます。あなたの方も、お元気でね。 チズより



1974年8月23日

マコへ

この夏季休暇中、6日間ほど憧れの湖水地方へ出掛けてきました。一人旅を億劫がる私がかかなり精力的にあちこち歩き回って、本当に生涯になく晴れ晴れとした気分になって、ロンドンに戻ってきました。日本でもいろいろと美しいものは見たけれど、ここの湖水地方は規模がそりゃあ大きくて、まるで自然の豪華さを誇っているかのよう・・・。



るかのよう・・・。あなたもロンドンに来る折りはぜひこっちの方まで足を延ばして山々を歩き回るといいですよ。ユースホステルはひじょうに設備が整っていて、何かと便利には違いないの。

私は残念ながら今回は利用できなかったけど。シーズンのピークで、どこも満員だったの！と何か何というか、これ迄の不安と焦躁感に満ちた過去におサラバする契機となったというか、これからは末広がりの感がするのよ。どうかしらね？！

しかし、まあ、我が家の両親はえらい娘を持ったもんだと呆れてるかしらね。お父さまには投資してくれるようにと説得しておいたものの、両親共どこまで私が本気の話なのか、半信半疑でいたみたいで、何やらウヤムヤのうちに、結局私が押し切ってさっさと出国してこちらに来てしまったわけだから、何やら親をペテンに掛けたような罪意識がなくもないのです。10月から始まるパーソナル・アナリシスの件、その費用を思うと、本当にカアと血が頭にのぼるというか、冷汗が出るというか…。それでも、どうやら両親共そのこと覚悟をしてくれている様子なのです。でも、さすがに＜何カ月そのことは続くのか＞って問い合わせがあったのです。私は、修了する迄続くなて、本当のことと言えん心境でした。というも、いずれ私の方も実力がついてくれば、病院でのサイコセラピイの仕事以外にクリニック（タヴィストック）でもパートの仕事が得られるだろうし、ロンドンで日本人のプライベート・ペーシャントを持つとか、翻訳ものを日本で出すとか、それなりに収入の道をなんとか考えられると思うので、今のところ両親にあまり重荷を負わせたくないのです。（だから、これ内緒です！）

児童の分析症例を担当する場合、それ以前に最低1年間のパーソナル・アナリシスの経験を要すると規約にあったけど。それは絶対そうだと思う。難しいもんだよね。長い長い道程だと思う。2年生のウェンディは6年間も分析受けてるし、同期のキャロラインは既に3年の分析（アメリカとロンドンで）の経験がある。親たちが精神分析家だから、彼女らは精神分析の‘第二世代’というわけだね。ガッチリと伝統を引き継いでいる。羨ましくないといえば嘘になる。それだからってセラピイ能力が私以上に（素質なり又は実力として）あるかと言えばちょっと疑問符な

のよ。だからおっかしなものなのね。‘孤闘’と言おうか、‘華麗なるバクチ’と言おうか…。私は着実に慎重に進歩を見せていると思うけど。ほんとにどうなのかしら。私みたいなのが一人日本人でこんなことやっているってことになにか画期的な意味があるのかしら。能力と親の経済力と、それに自信やら気概やらがひとまず揃っているケースとして、確かにこんなことをやれるのは私が最初で最後かもねと思ってしまう。それに前例になく、若いでしょ。それだけでもなく、身分上私は日本に軸足が無いということがもしかして逆説的に‘強み’になってるかしら。後も先もない、今・ここしかないといった心境です。

あなたの方も、現在いろんな人々から認められつつあり、勉強の方もさらに拍車が掛かってゆこうとしつつある様子が窺われ、とても悅んでいます。未来の生活設計を大事にしましょ！

チズより

.....



1974年9月18日

マコへ

お手紙、今朝届きました。あなたの言うこと、本当なのよ。これ迄生活を安定させるのに四苦八苦してきたでしょ。それはきれいさっぱり片付いたのですが、今度は精神生活の上での苦闘が始まるってわけなの。しかしながら、誰も彼もが私に援助を惜しまないといった、実に恵まれた状況にあり、ここ迄辿り着いたことの大きな安堵を覚えます。

今になって言うのもおかしくも傑作なのだけど、私、クライン派に傾倒しつつある。まだまだその理解は大変幼稚で未熟ながら、いずれ将来満足できるレベルに達するものと確信してる。

英語力の方も年々上達しているように思えますし、やはりそれは大変なことで、アメリカ人やカナダ系とかの英語圏から来た者はともかくとして、一般に外国人で修了後に【タヴィ】に残って指導陣に加わるといった人は殆ど皆無に近く、国情やらの違いからなのか、この道で優秀な逸材ってのはほぼ英国系で占められているという具合で（ドイツからの移民は初期の時代にはいらしたみたいですけど）、外国人の授業料が英国人のその2倍以上もするという事実も解らなくもないのです。

この派の基盤に、乳児（1年未満）の心的生活に関する深い洞察があって、私、学べば学ぶほど、その1年間の意味の深さをずっしりと感じるのですが、あなたも興味を覚えると思います。が、何と言っても、そう簡単に解るというものではなさそう。長い年月がかかり、「パーソナル・アナリシス」を受けながら、又セミナーなどを受講することで少しずつ見えなかったものが見えてくるというものなのだろうと思う。つまりは、自分の中に見えるものしか見えないというわけね。

「パーソナル・アナリシス」の期間は、規定ではトレーニングを受けている間ずっと続けるということになっているのです。ですから10月から始まって、最低3年間ということに私の場合はなります。子どもの分析のセッションを担当できるのは、少なくとも半年か1年のパーソナル・アナリシスの経験以降でなければならない規定ですから、来年は私も【タヴィ】で仕事を持てるはずですよ。今の病院での仕事もちろん継続します。今年だけの経済状況を言えば、私が1セッションにつき4・22ポンドもらえて、ミス・ウエデルには1セッションにつき5ポンドをお支払いします。私は週に5セッションで（つまり5ケース担当）、

分析も週5回で、そういうわけであら、80ポンド（大体5万円ちょっと）の仕送りを家からしてもらえれば、ぎりぎりでも何とか暮らしてゆけるという具合で、来年以後はずうっと見通しは明るいということになります。今年は【タヴィ】内で、月曜日と火曜日にそれぞれ2つずつタ方のセミナーに参加を予定してます。

病院の方へは週3日通いますが、仕事量は週5セッション。と言っても、今のところ実際にはケースは全然持たされず、自分のセラピールームで片付け物をしたり、折々にスーパーヴァイザーの Mr.ジョン・ブレンナーとお喋りしたり、時には児童精神科病棟の症例検討会議に出させてもらったり、至極お気楽な身分なのです。おそらく2週間以内にはひじょうに面白いケースを担当させてもらえると期待してるところ。

それから、私の当面の関心事として、何と言っても日本の臨床の状況を知っておきたいので、何でもいい、為になるとあなたが思うもので出版された本とか論文とかを船便で送っていただけたら、ひじょうに有り難く思っております。お願いできますか？

と言うのは、臨床上における徴候は同一でも、こちらと日本ではその成立の過程がどうも違うように思いますし。当然セラピイのあり方が、それに応じて考えなければならないわけで…。私、『日本広報文化センター』の図書室でたくさん文化論（特に外国人が日本を体験してどう感じたかってこと）を読んだんだけど、おもしろかったわよ。それに、『ジャパン・ソサイティ』やら、【英国錦鯉協会】ともつながりを持つなかで、私自身が体験したものもあるでしょ。おもしろいことは、たぶん問題の徴候のあらわれ方にしろ、その

治癒のあり方にしても、絶対に‘日本的’というものが無いはずは無いと思うのです。特に現在興味があるのは「登校拒否」のことで、私、何がどうだったのか、その問題点を忘れちゃっているの。出来たら知りたいのです。今でも日本の京大の地下の『心理教育相談室』で関わった臨床例の子どもたちのこと、いろいろ記憶を反芻しています。振り返れば、あの折りにどうしようもなく限界と思われたことを一つずつ切り拓いてきて、やっとのことここ迄来たわけね。この状況で腰を据えてやろうという意気込みが出せるところまで来たことをやはり幸せだと思う。あの当時読破していたアンナ・フロイト系のものは、今にして思えば自分の求めたものじゃなかったと思う。何と言っても、理論構築の言葉が災いして、もう一つ子どもの心情にピッタリと沿わないというか、言葉があるだけに、もうそれで解った気になるといったような頭打ちのところがあつたと思う。自分ながら、どうも不満足を覚えてならなかったのだけど。でも、あれも無駄だったとは思わないわね。

あなた覚えているかしら。私の卒論（愛知県女大）、例の《児童分析の治療原理についての一考察》だけど、その前扉ページに私がわざわざ載せておいたウォルト・ホイットマンの＜草の葉＞の詩篇のこと！〔その子どもが見たもの、それが彼の一部になった〕というやつね。私の論文の中身よりも何よりも、あの一篇の詩の意味が重大だったことをつい昨日メラニー・クラインの本読んでいた時、ふと思ったわけ。だから遠い遠い回り道をしてでも、辿り着くべきところに辿り着いたと言えるのだろうと、今の自分を思うのです。何とまあ、我がままに生きた人生だわね。‘我執’が強いとはねえ、自分でもついぞ知らなかったよ！！親には一生頭があがらないわねえと内心思う。

ところであなたの方、いろいろと世情の穏やかならぬことを耳にすることの多い今日この頃だろうと思うけど。ロンドンにいたって、日本の巷のあれこれがちよいちょい耳に入ってきてます。東京では最近のデータによると、胃潰瘍を始め、いろんな心身障害というか、体にあらわれる情緒障害が増えているとかなんですってね！？

それはともかく、あなたの将来のことだけど、どうなのかしら？ 職場を変えるのも一つのチャンスよね。とにかく満足のゆく線に落ち着くように、どこ迄も頑張ってくださいよう、切に祈ります。いずれ又。 チズより



1974年10月21日

マコへ

この頃ずうっとご無沙汰だったかしら？ 私、「パーソナル・アナリシス」受け始めて、3週間やっと過ぎたというところ。何とも言葉に尽くせぬ思いなのです。恐ろしくも、又偉大でもあるのだなあ、人の心がわかるってことは…。そんな感想です。莫大なお金に換えられぬ程の貴重な経験で、私は、まあそうねえ、やっとここに来たことを喜べる心境に至ってます。それで近頃は、いよいようまくゆきそうな気配が感じられ、そして自分のしていることのずっしりとした重みを感じるにつれ、私側の責任というか、いろんな人との関わりを考えればもはや引くに引けないわね。簡単に厭になったから、私去りますってわけにはゆかないってこと。これはえらいことになったぞと内心ちょっと泡食ってる。確かに今迄だって、決して楽な生き方をしてきたとは思わない。人一倍苦労してきたようなつもりでいたけど、無我夢中というか、孤軍奮闘というか、その中にも随分まだ若い

ゆえの甘さがあったと思うの。身の軽さというのか、厭になれば、どうしても切り換えできるってな気持ちでいたと思う。それが今ここに至るや、もう大人として、まるで起業家が自分の会社を営んでゆくような冷徹さ・管理能力みたいなものが、自己の現在の生き方に必要とされつつあるといった気がしてる。そうした意味で、我一人生きることの重さをがっかりと背に負って立つといった心境というのかしら。私たちも年をとったものです。確かに結婚すればするで、いろんな煩雑なことがらも増え、自分一人すらまるで扱いかねる程のしんどさを経験して、その上他人の分までも背負うことの無謀さを思わないこともないけど、人間の生きてゆくことの面白さってのは、そういう場合でも、それなりの新たな勇気やら解決の糸口を見つけてゆくということらしいですね。それはともかくとして、今は只、一所懸命ただ一筋に、自分一人生きて、日々の与えられている仕事を果し終えてゆくことのみに賭けているというような具合です。一人で淋しいやろなあと思われるとちょっと癪というか、いい気持ちしないし。こちらでは誰ひとり愚痴めいた話などしない。でもちょっと耳にすれば、【タヴィ】の教官方も多くがかなり晩婚というようなことらしい。そう言えば、病院の私の直属の上司であるジョン・ブレンナーは時折、そうした、かつての孤独感を私に吐露なさるの。研修生の頃、公園を散策し池の畔でカルガモの親子を眺めながら、自分はいつになったら家族を持てるのだろうかって、思い悩んだとかね。それが今や若きジェントルマンにお育ちの、ご立派なご子息が4人もいらっしゃるわけだから、それも昔の懐かしい思い出話で。私はニコニコしながら聞いているのよ。

写真では、お解りのように、私、何であんなにニコニコ嬉しそうにしているのかと思っちゃう

ほど、幸せそうな顔してるでしょ。全然無理してそうしているとも考えられないしね。いろいろなこと、パチパチとそろばん弾いてみた結果、「これで良し！」といったような手応えが今の現在の私の生活にあるからだろうなあって、心底そう思えてなりません。でも、まだまだ内心では心細い思いでいるの。傍からみればびっくりする程に業績をあげつつあるのかも知れないのに…。何しろ今でも親から置き去りにされた子どものような気持ちでいたりすることもあったりで。もう少し気持ちが整理できて、余裕のある物の見方・考え方が出来ることを頻りに願っているところです。

私の方、時折あなたに送ったらいいかも知れないと思う本を見つけたりしますし、又私の観察レポートも、あなたの何かの役に立つかとも思ったりするのですが…。そのうちそう致しましょう。それでは寒くなりますから、風邪を引かぬように。総てことがうまく運びますよう、祈ってます。

いずれ又。 チズより



1974年11月3日

マコへ

元気なおたよりで安心しました。家庭内の紛糾の方もいずれ夫婦調和への前提と考えたく思ってます。先日お父さまの方へ、例の【英国錦鯉協会】の件で、お知らせしなきゃいけないことがあって、そのついでに今の私の感慨などを綴っておきましたので…。

さて、あなたの学会発表なされた折の話だけど。はたしてどれだけの人に理解されたか心もとなかったとのことですが、こうしたことは本当に誰が誰にどう影響するかってことは解らないもの

だと思います。実際に臨床上、子どもの中に何らかの進展なり回復なりを認めることが出来るならともかく、唯いたずらに夢を追い掛けて終わったような、そんな贅沢にも惨めな感慨を持つのだろうかと思うこともあるわね。それでも尚シャとして、どこかで何かが、こだまして返ってくるような反応を、あなたの存在の裡に感じる事が出来るうちは頑張ってゆけるかしらね。

私の方は、この頃、ボロボロ泣きみそで大変なのです。分析の経験が意に反してあんまり嬉しくないからなのか、一つ一つの解釈が良かった、意地の悪いものに感じられてならないのです。まるで‘無意識’だけが立派に生きてのさばっているのでもあるかのように・・・。「自分」と思っていたものなんて、全然無いてことを思い知らされているのやら・・・。腹立たしくてならない。こんな年になっても、昔まだ幼かった私が感じたような心細さ、頼りなさを深く深く感じるにつれて、馬鹿馬鹿しくも愚かしくも思ったりしています。それでも日々約束の時間には遅れないようにとか、約束したことは果すとか・・・。結構忙しく追われていますが、その虚しさはたとえようもなく。一体何がどう不満なのか解らない程、混乱しているようなの。しかしやらねばならないことは、目の前にはっきりと出ているので、逃げるわけにもゆかず・・・。気分転換に全然違った人たちと違ったことをしたいなあと思って、フランス語などを勉強し始めようかと思ってます。

昨晚出掛けたクラシック・コンサート(ヴァイオリン演奏)は素晴らしく、深く胸を打たれ、自分の脆さを反省したようなことでした。近頃は気が乱れて、ごちゃごちゃと心が輻輳してるから持て余し気味です。いずれ又。 チズより



1974年11月10日

マコへ

先日はたいそう情けない手紙を出しました。ごめんなさい。自分にいつもいつも大丈夫！大丈夫！って言い聞かせているのだけど。＜頑張るなさい、やれるから！＞って・・・でもどっかで無理をしていたのか、両親間の揉め事が少なからず私への月々の送金のこと絡んでいると知るや動揺して、どないしょか、自分一人で我を押し通すのもここがギリギリのおしまいなのかと心細くもなり、愚かしいことなどあれこれ考えたりしたのです。

一方で、分析の方はここ2、3日ひじょうな好転の兆しがみられ始めました。やっとな、この苦しみを見据えてゆこうという度胸なり覚悟が出来たように思われます。病院の方はひじょうに興味のあるケースを担当してます。それに何と云っても多種多様なケースを耳にする機会が与えられてる。私はここに腰を据えて、頑張れるだけ頑張る抜こうという気持ちになってる。そろそろ精神的な自立の時期を迎えなくてははいけないんでしょう。本当にいつまでも大人になれない自分に焦躁感を噛み締めたり、諦観したりなのです。

それから、私も真剣にお金を稼ぐことを思い、あれこれ考えあぐねていたのですが。最近ロンドンにいる日本人の子どもがいろいろな適応上の問題を持っているというような話を聞いたので、ふと自分に何か出来ることはないかと思いついたのです。少しずつ知己を広めて、情報(状況調査)を得ているところです。おそらくいずれなんらかの進展があるでしょう。あなたにも随分とご厄介をお掛けして、本当にすまないと思っています。いずれ又。 チズより



1974年12月10日

マコへ

あなたからのたよりを毎日待っています。
お母様からのたよりもここ一週間程途絶えていますので、お父様の工場での事故後の回復の様子など、私はひどく案じているわけなのです。
お母様からのたよりはたいそう楽天的に響き、お父様の方、鼻の傷跡は少し残るかも知れないけど、遅かれ早かれ全快するだろうとのこと、私の方へは惜しみない援助をすること、夫婦仲もごく円満にゆき、雨降って地固まるとの由。それにしてもお父様は痛い思いを代償として払わねばならなかったのね。私は可哀相でなりません。深層心理の観点から言えば、この度の事故は、お母様が言われるような‘自己処罰’ということがあったのかしら？それにしては痛ましくも恐ろしいことです、人間というものは…。それもこれもみな私が蒔いた種だとしたら…！罪を憶えてなりません。特にお父様の視力の回復については、ひじょうに案じておりますので…。ぜひ真相をすぐにでもお知らせ下さい。お願いしますね。どうぞくれぐれも頻繁に連絡をし合って、両親を力づけてやって下さるように。何と言ってもあなたは精神的に我が家の大黒柱なのです。私は時折ショックの余り、心配で涙ポロポロしてますけど、大丈夫です。ぜひおたより下さい。

ところでパーソナル・アナリシスの過程において、私が心のどこかで、家の者に迷惑をかけていることを申し訳なく思っていることが、もう一つしっかりと腰を据えて、この仕事に取り組めなくしていることが、はっきりして来ているのです。私は親に信頼してもらって、誇りに思っていただけに随分努力してきました。それが先決だ

と思ったのです。それでも尚、週5回で(月曜～金曜)、1回5ポンドの分析セッションが、少なくとも3年もかかるであろうということを、どのように親に解ってもらえるのか…。いつでも心の隅に、どの程度迄ゆけるものやと、自分の技量などを値踏みしたり、そんなことはやってみなきゃ解んないのは誰でも同じであるわけですが…。問題なのは彼らにとって自明の理であるところの分析的なものの考え方・見方が、私たち日本の精神土壌に根差していないということだわ。「精神分析」というものへの傾倒やら帰依ということからして、ほんと底が浅いのよ。折々噴き出す私自身の懷疑というものだって、決して無理からぬものだと思うわけ。当然ながら何も分からない親たちを巻き添えにしていることの心苦しさは言葉になりません。それでいて、此地でいつぞや或るところで或る人に、＜日本人は家族主義ですし、精神分析なんて必要ないんじゃないですか＞なんて云われたときなんて、まるで馬鹿にされたみたいにカッとしたんだから、変だわよね。

その点、【タヴィ】の教官方は決して無理押しをせず、私自身のペースで少しずつ少しずつ進歩を遂げてゆくことを期待してくれている様子なのです。それは長い長い道程であるわけです。職にも就き、パーソナル・アナリシスを開始して以降、2ヶ月余りのこの月日の間に、自分で意識していないところで、随分相当なる自信を身につけてきたと思うのです。

それから、受講しているセミナーだけど。ワーク・ディスカッション・グループ、インファント・オブザーベーション・セミナー、イントロダクション・トウ・サイコセラピー・セミナー、そしてリーディング・セミナー、以上のただ4つだけですが、自分がこれ迄観察し経験してきたことが、いろんな意味

或る‘思想’が人々に浸透してゆく過程と
 いうものは不思議なものであり、何かしら眼にみ
 えないう‘力’の存在をも思うわけです。例えば
 「精神分析」というものも、日本の風土へどのよ
 うな過程で、かつどのような形で移植され、そし
 て培養されてゆくものか、それは大きな興味なの
 です。その点に関しては先進国であるアメリカや
 ら英国にはそれなりの歴史があり、日本の現状
 と比較する時、その相異点なるものは、端的に
 は、トレーニングを受ける個々人のこの学問に
 対しての‘受容性’に、更にはその彼らを経済
 的に支援することを余儀なくさる筈の親たちの
 ‘許容性’に焦点が当てられるだろうと思うわけ
 です。現在、分析料金の相場は1セッションが6
 ポンドです。私もそのうち近々その線でゆくことは
 必定なのです。月々約130ポンドという大の男
 の1ヶ月分の給料ほどの仕送りを親たちに依存
 していることの心的葛藤をどのように【タヴィスト
 ック】の訓練生 trainee の皆さん方が解決してい
 るのか、興味深く調べているところです。そうした
 難問を乗り越えて、なおかつそうしたいと思う切
 実な思い(我意 or 熱情？！)がいったいどこか
 ら湧き出るものなのか、私は考えざるを得ないの
 です。いずれ又。



久し振りの励ましのおたより、ありがとう。いろいろとご忠告などもありがとう。私もこのところ、ひじょうに淡々とした心境なのですが、それだって、皆からの支えがあり、家(あなたを含めて)からの経済的援助の保証をいただいたからこそ話なのですから、我ながら何となくいい気なものだと思ってみたりするんですけどね。あなたからは、私の成長の過程において「必要なものは貪欲に欲せよ」とのお言葉いただきましたが、そうなりたいとは思いますが、そうなればなつたで、可愛いげ無い風にも思えるし、まあ今のところはひたすら、申し訳ございません！の低姿勢でいるのが無難だろうと思ってみたり…。まるで‘綱渡り’の人生で、一刻として、これでいいのだと、開き直ることも出来ず、行きつ戻りつをやっております。いろんなことの中で日々揉まれておりますわけ。今日明日のスケジュールに合わせることに四苦八苦で、落ち着いて、「幸せです」などというような言葉をあなたに伝える余裕もないわけで、自分でも一体どういう気持ちでいるのかさっぱり解らない日々で、ただ追われるように生き暮らしているものですから、つい筆不精になってしましまして、ごめんなさいね。

ここずうっと4週間連続で、毎週ケース発表をし続けるなど(別々のセミナーですけど、
 どういうわけか、そういうしんどい具合になって・・)
 頑張ったお蔭で、晴れて無罪放免。今はただ
 遊びたい心境なのです。時にはうまくやったあ！
 って勝ち誇ったような気分になったり、もうメチャメ
 チャに悲観して、闇のムードになったり繰り返
 しのです。あなたの方へも、私の書いたもの

(レポート)を送ろうかと思う時もあるけど、どうい
うわけか、そういう気分が続くと、自信を持って人
に見せたいなどということが出来なくなって、つい
つい持ち越しの状態で、あなたにはすまなく思っ
ているのです。さて、あなたの方の乳児観察はど
んな進展をみせていますか？ 私もあなたにぜ
ひ適当な本を送ってあげたいと考えているので
す。もう少し待ってくださいね。とにかくそれをどう
解釈し理解するかは別として、見た事実は事
実としてはっきりと記憶し、かつ記録しておくこ
とが必要なようです。そうした観察事実の集積が
経験からくる把握となり、いずれ統合的な理解
へつながりましょう。忍耐の要ることですね。

私などはついつい優等生になりたくて、サイ
コセラピストとして一人前(の卵)のような錯覚で、
誇り高いところがあったと思うのですが、この頃は
本当に学生(学ぶ者)という身分に自分を限定
づけています。セミナーが一つ増えました。最近、
どんどんいろいろな人(教官なり、経験のある人
たち)に出会えるのは嬉しい限りです。それがね、
それぞれが驚くほど個性やら、それにテクニクな
ども違うのよ。私も私なりの成長を期待してゆこ
うと思っているのです。病院での仕事は、私への
評価はともかくとして、やっぱり仕事そのものは好
きです。いずれ又。 チズより



1975年3月4日

マコへ

しばらく音沙汰ありませんが、相変わらず
忙しくしていることでしょうね。私のほうも、多忙
を極めていますが、昔のように、焦躁にみちた思
いでいるという風じゃなくて、かなり淡々としてき
ています。実際には解んないことが山積みの状

態で、それも所詮時間をかけねばならぬことは
悟ってますから、気持ちを落ち着かせているわけ
ですけど。この頃は自分で何をどう考えているの
やら解んないといった思いがします。刻々と変わ
ってゆきつつある自分をそう簡単には把握出来
ないものです。いろんなことを経験し、いろんな
人と出会い、まるで切っては捨て、切っては捨て
の連続で、それで何が残ったかと言えば「自分を
守る」というスタンスなのだと思う。どうやら残念な
がら、私のなかの純情っぽいものって、少しずつ
擦れてきているみたいです。それもやむを得ませ
んわね。その代わりと言ってはおかしいけど、見
聞が広がって来てます。知れば知るほど、面白
いものですねえ、人間のやることは…。じっくり見
詰めてゆきたいものです。やはり異国にいれば、
何度も足踏みしたり、後戻りしては再び前進と
いったことの繰り返しになる。これ迄は迷うことば
っかりだった感が否めません。ここら辺で、前向き
に奮起しなくてはと思っています。

現在、【タヴィ】の近くに下宿先を探してい
ます。分析に通うにもより都合のいい、勉強にも
専念でき、プライベートな憩いを得られる自分
の空間をぜひとも確保しなきゃって思ってます。
日本では経験しなかったことですが、住居って、
食よりも衣よりも大切なのだなあ、そのもたら
す情緒的影響には驚いています。殆ど願った
ものは得ている私ですし、根気よく思いどおりの
ところを探すつもりです。この頃、疲れを著しく感
じるのです。人にも言われるけど、落ち着いた雰
囲気は確かに身についてきている様子、でも己
自身の笑顔の裏にある殺伐とした思いにふと気
がつくことがある。【タヴィ】のセミナーすらも魅力
が失せてしまっているような…。病院の仕事の
方だけは、誠実にやっています。それさえも怠け
るようだったら、おしまいなわけですけどね。

ぜひ近い将来、ロンドンに訪ねてきてく
ださいませんか。私も会いたいです。八月頃、
1カ月間程の休暇取れないかしら？ どういう自
分になってゆくのか、すごく不安です。と言っても、
日々アップ・アンド・ダウンの連続ですので、心配
しないで下さい。でも、どうぞ本気でこちらに訪
ねてきてくださることを考えてみて下さらないかし
ら。いずれ又。 チズより



1975年4月8日

マコへ

昨日手紙を出したばかりのところで、今
朝あなたからのたよりをいただきました。あなたの
最近の心境もよく解り、ほぼ同じ考えであること
に安心しました。今年の夏、来はりますか？どの
ぐらいの休暇がもらえるのかしら？私の方は、
八月は自由になれます。少なくとも分析から。そ
れに病院での仕事も3週間は休むつもりよ。

「イースターの休暇」が終わるや、人々は
もはや夏季休暇のブッキング(宿泊やら航空券
やらの予約)で大忙しの状況で、その真剣さは
我々日本人には考えられないぐらいですが、そ
のために働いているのだからって、万事徹底して
るわけ。何しろ、どこへもかしこへもピョイピョイと
ゆける時代であってみれば、金と時間さえ用意
できれば、ありとあらゆる贅沢なり、見て愉快な
るものを手に得られるのは容易なわけです。
人々はどうも刺激に飢えているというのか、それ
でいて easily get bored(簡単に退屈しちゃう)
わけ。本当には心の満足がないのです。あれ見た、
これ見たと言ってもは大騒ぎする中で、生活を
何とか退屈せずにいられるというわけね。

それですから、あなたが東洋思想に深く浸
透してゆく姿をやはり私は貴く思うのです。本当
に心がそれを求め、かつそれを知ることによって
喜びに充たされる人は幸いだと思う。そこ迄へ行
く迄の過程で、如何に多くの人がさ迷っているか、
だからこそサイコセラピーが必要とされているとい
うことですね、この現代の混迷期に・・。

その観点から世界の人々の様子を眺めると、
その多様性には実に呆れるほどです。アフリ
カやら東南アジアのいわゆる未開社会にも、彼
らなりのロジックがあるわね。宗教的にも、カトリ
ックなり、「生長の家」なり、その他それなりのロ
ジックあり、それによって知的・情緒的存在者とし
ての安定感を持って生きているというわけで・・。
見掛けの文明・文化の違いやら、そのレベルの
上下云々以上に、そこに一脈通じる生活者の
真理(人間ってのは、どうであれば精神的に安
心できるものなのか)ってのを教えていると思うの
ですが、それが肝心なのだと思う。だからそれぞ
れがそれぞれなりに、貴ばれねばならないと思う
のです。

それから、それ以外にも、‘既成のロジック’
ではもはや充たされないという人々が増えてきて
いる現象をも無視できないわけです。それら
個々の人の中に、何とかしてロジック(意味存
在なり、その感情なりの意味)を探してゆこうと
するのが、精神医学・臨床心理学のようです。
又々、そうするための方法論ってのはワンサとあ
って、その選択にも、選択する人の存在のあり
方が拘わっているわけですが、その多様性そして
実際にそれが有効性ありと実証されている事実
なりを知れば知るほど、解んないものだなあと思
ってしまう。「精神分析」、それもクライニアン・ス
タイルを容認しようとしている自分を不思議にす
ら思うのです。一種のプレーン・ウオッシング

(brain-washing)なのかと空恐ろしく思ったり。時折それが言っていることが実際に多少なり経験の中で意味を持てき始めると、何とも言えない深い人間の心理に驚き呆れてみたりという具合で・・・。ともかく人間を(自分も含めて)解ってゆきたいですねえ。それがまあ究極の願いになるんでしょうね、精神分析云々はともかくとして・・・。私はいつもいつも悩み、不安で「解らない・・・」という思いに圧倒され、身心共に押し潰されそうになることがあったけれど、やっぱり今している仕事を捨てないよ。あなたも捨てちゃダメだよ。いろんなこと吸収して、生活経験を増やしてゆくと共に、サイコセラピストとしての成長を常に心掛けてゆくのが真っ当だと思う。‘私という存在’が散漫にならないために・・・。

いづれ又。 チズより



1975年5月11日

マコへ

最近急激に活発に動き回っているせいか、ご無沙汰しましたけれども、あなたの方、その後順調ですかしら？

先日の【英国錦鯉協会】ご一行の訪日の際には、随分とあなたが活躍してくださったとのこと、お母さまから伝え聞いています。日英の錦鯉愛好者同士の親睦やら『愛鱗会』との交換行事やら盛り沢山だったみたいね。会長のアレンさんから礼状が届いてますし、シールさんの奥さんのポーリンからもお電話いただきました。彼女、とびっきり興奮してらしたわよ。すご〜く感謝してるって・・・。いろいろとほんとご苦労様でしたね。有難う！

ところで、私の病院での仕事は、ひじょうに収穫のあるものになりつつあります。何と云っても、テクニックのあり方が、最初の頃、恰好が付かなくて。Mr. プレンナーはあなたの思うとおりにやりなさいとよく励ましてくださる。でも無理もないのだけど、分析の己自身の経験からくる迷いとか猜疑心とかで、どうしてもなく動揺することは度々なのです。

最近、或るアダルト・カレッジ(市民講座)で、プレ・スクール&プレイ・グループ・リーダーのためのコースに入ったのです。週一回です。こちらでは、幼稚園(ナースリー・スクール)とは別個に、3〜4歳児のための「プレイ・グループ」というのがあって、1日、2時間の自由遊戯だけど、主に母親たちが自主運営している。その特徴からして、他の場合(専門の保母たちの運営)とは違った意味でおもしろいのです。とにかく参加している母親たちの生の経験談を聴いているだけでもすごくためになります。私は半日(週)だけ、実習に或る「プレイ・グループ」に参加してます。教会のホールを貸してもらって運営してるのだけど。その地域は、ロンドンでも比較的落ち着いたミドル・クラスの人々の住宅地域にあるためか、子どもたちはひじょうに健康的、ともかくノーマルなので、私にとって貴重な体験なのです。

それから、何故なのか、最近とても気になって調べていることがあるのです。それでいい本を見付けてびっくりしました。『古代祭祀伝承の研究』(山上伊豆母著、雄山閣)。大した文献で、その研究の奥行きには唖然とする思いでした。それから、「人間を考える」対談シリーズ。再び読んでなおさら感激を深めました。日本は、人間を知る上で、ひじょうにすぐれた‘遺産’を有する国であると思う。随分と励まされたのよ。

わざわざ異国を訪ねなくても、すぐ足元に貴重なものが落ちているということだね。

只こちらの児童書とか絵本の豊富なのは目を瞠る。あなたは絵本が大好きだったわね。此国の子どもの絵本って、そりゃあ素晴らしいのです。いずれ近々送しましょう(船便で)。愉しんで下さい。ではご健闘を祈ります。

いずれ又。 チズより

.....



1975年5月30日

マコへ

先日は、おたよりありがとう。返事が遅れまして、ごめんなさい。私の方、あなたの予定に合わせて、旅行の計画を立てるのが一苦労で、それでも何とかまくゆくそうです。こっちの人々は、そりゃ真剣に休暇を楽しむという具合だから、宿も半年も先駆けて申し込むという始末。それで結局ユースホステルを利用するのが一番いいと判断したけれど、私は実際そうした経験が全然ないので、どうなることやらと思いますけど、設備やら交通の便やら食事やら安上りで、比較的満足できると聴いてますし、その場その場で、ベッド&ブレックファーストの安宿を探して歩くよりいいと思っています。とにかく八月はどこもすごい混みょうなのでユースホステルからの(13箇所!)返信を心配して待っています。スコットランドから湖岸地方へと、又、ウエールズから南へ下がって海岸地方へと英国全土にかけて旅行を計画したのです。きっと素晴らしい大旅行になると思います。2週間の予定で、スケジュールを組みました。7月31日~8月13日です。それ迄はロンドン近郊とか、ロンドン市内の見物やら、あれやこれや考えています。

あなたがバード・ウオッチングに凝っていると聴いたので、そうしたことに随分楽しめるようにと配慮しましたし、私はあなたと違って、野山歩きに慣れてないのですけど、2週間は一緒に頑張る覚悟です。靴とか雨具とか、そろえなきゃね。それから、服装のことだけど、こちらは八月でもかなり秋のような、やや肌寒い気候です。で夏服は要らないと思ってください。長袖のブラウスにカーディガンとかがむしろ必要です。あなたのロンドン滞在中は、ジェーンが折り畳み式のベッドを持てますから、フラットの客間に寝泊りしてもらえます。どうせいつも飛び歩いていることでしょうし、ここでそれ程窮屈な思いをしてもらわずに済むものと思ってます。どうかしら?

それから、今回ぜひあなたに持参していただきたいものという、まずあなたの方の研究論文とか持ってきてくださいね。それから心理学関係の雑誌も...。私の方もケース報告など、あなたに知ってもらいたいこと等、そろえておくつもりです。おみやげは、何よりも本が欲しいのです。この頃、日本の民俗資料が見たいです。講談社現代新書・「日本のシャーマニズム」(堀一郎)、「日本人の論理構造」(坂本元)、それから岩波新書の「舞踊の文化史」(邦正美)があったら、手に入れてくださいますか。実は、現在読んでいる本があるんだけど、『日本の文化ードイツ心理学者のみた』(インゲボルグ・ヴェンド著、みすずブックス)は感動的でした。この際、日本を外からの視点で見たい。それであなたが薦めてくれる何かいい本があれば、ぜひ持ってきて下さいますか? お願いね。それではいずれ又、ご連絡いたしますので。

チズより

.....



1975年6月5日

マコへ

あなたが来るのがもう直かと思うと気持ちは複雑で、一緒に帰りたい衝動を抑えるのに大変やろなあなんて考えているのです。ユースホテルからの承諾の返信がポチポチ返って来ますし、万事うまくゆくようです。あなたの方、会員になっていたかしら？ もしそうでなければ、その手続きをして下さるように。飛行機便のこと、何日何時着など解ったら知らせて寄越して下さい。私も初めてのことでちょっと不安。でも大丈夫よ。でも念のため電話番号を知らせておくわね。Tel: 935-4676です。飛行場からタクシーを使っても、たいした距離じゃありませんし。でも心配には及ばないと思います。私の方で万事心得てますし。必ず出迎えにまいりますので。

私などは、山歩きに慣れているあなたのように、長旅に耐えられる強靱な体力があるかどうか不安にも思ったりもしますが、大体はそれ程遠距離を歩くわけじゃなく、駅に程近い、適当な場所にユースホテルはあるのよ。もしお散歩程度が物足らなければ、充分あなたのお望み次第で予定を延長したりなどして、融通がとれるように日程を考えています。あなたもいろんな国から来ている若い人たちと話すのも興味深いと思うし、その点ユースホテルでは、何かとハプニングがあって、楽しい集いの場であると想像しているのですけど。

私もいよいよ大変な時期を迎えております。いろいろと話したいことが一杯ありますけど。とにかくあなたと共に自然を楽しむ覚悟でいるのです。でもケース報告など、資料の吟味

など一緒にやれたら面白いかと思います。それから経費のことですが、旅行中の宿泊(朝食・夕食込み)は14日間で£24程度ですし、その他おみやげとか、ほぼ£100あれば充分かと思われます。ではいずれ又。 チズより

.....



1975年7月6日

マコへ

あなたの来るのを待ってます。もうすぐですね。あなたはどうか他に宿をとりたい様子ですが、私のフラットでジェーンが折り畳みのベッド一式持っていて、あなたが泊まれるようになってるのですよ。でもどこか近くのホテルに部屋を取る方が気楽なら、そのように手配しますが。来た折りにも相談することにしましょうね。

つい最近のことですが、久保紘章という方にお会いしたのです。彼は四国学院大学の心理の教授で、『モーズレイ病院』に1年間の研修留学なんだそうです。どうやら日本ではファミリー・ワークとか臨床経験もありとのこと。自閉症に興味を持っておいでとか。それで、その方を通して慶応の小此木啓吾先生が今夏のロンドンで開催される《国際精神分析学会》に出席のため、渡英なさると伺ったのです。それで彼が私に、小此木先生に会うのがぜひよろしくうとおっしゃって、連絡してくれることになってます。お越しになることは確からしいのですが、まだあちらから久保先生の方に連絡が来てないので、どうなっているのやろって彼が案じてます。こちらの学会は7月21日～24日と伺いました。あなたの方、名古屋のシンポジウムで小此木先生にお会いするわけですし、ヒョットとした折りに、そんなお話が出るのやないかしらなどと思っています。

さて、私はやっと、ここ最近になって、自分が何をしているのか解り始めたという具合です。前途多難であっても、これ迄のように混乱した状態とは違って、しっかりと構えてゆけそうです。此地に滞在して3年目にして、ようやくそうしたことが言えるってわけですから、まったく‘大器晩成型’(!)っていいのか、知恵づくのがほんとに遅いってわけです。

それから、昨晚読んだ本はすごかったです。上山春平・梅原猛共著の『日本学事始め』(小学館)です。実に示唆を多く含んだ書で、日本人の知性なり、人間観の豊かさなど、これ程強烈に感じたことはありません。出発間際で、あなたに面倒掛けるのも悪いのですが、もし書店で見掛けましたら、次の本持ってきていただけませんか？

●梅原猛:「仏像一心とかたち」(日本放送出版協会)、「美と宗教の発見」(築摩書房)、「地獄の思想」(中央公論社)、「人間の再発見」(角川書店)、「隠された十字架」(新潮社)

●上山春平:「歴史分析の方法」(三一書房)、「明治維新の分析視点」(講談社)、「日本の思想」(サイマル出版社)、「神々の体系」(中央公論社)、「歴史と価値」(岩波書店)

以上です。

さて、最近ちょっと驚いたことに、ミセス・ハリスからお話があつて、日本人の女の子のケースを依頼されました。話がどう進展するか現在のところ定かではありませんけれども、一応ジョン・ブレンナー氏とも相談しており、セント・ジョージ病院・児童精神科外来の受け入れ態勢はかなりいい方向にいつてます。ともかくサイコセラピイってのはどこにおいてもいろんな問題を抱えているわけだけど、やはりその最たるものといえば、

なかなか適当なケースが見つからないということです。【タヴィストック】ですら、慎重を期して親たちとの面談を半年・1年と重ねて、ようやくセラピイに子どもを導入するといった具合です。子どものセラピイへの動機付け以前に、親の本気さ加減が試されるというわけで、児童臨床の難しさはいずこも同じだわね。その中でクライン派であるということはどんなことを意味するのか、少しずつ自分の位置づけみたいなのに洞察を持ちつつあります。どちらかといえば、選ぶ・選ばれるといった成熟した関係にはまだ至っていないみたい。此の点では日本ははるかに遅れを取っているわね。個人開業よりも臨床機関に子どもを預けるほうが親にしたらまだましと思うんじゃないかしら。また、この続き、じっくりお話できるといい。

それじゃ、27日の15:40、ロンドンでお会いしましょう。無事に快適な空の旅を楽しめるように。それから私もお正月には、日本へ、3週間の休暇をもらって、一時帰郷するつもりでありますし、無理していっぱいおみやげを買って来てくださることはありませんので、念のため。

いずれ又。

チズより



1975年8月18日

マコへ

英国を二人で駆け巡った旅は愉快だったわね。あなたの方も再び日常生活に戻られたことと思います。空旅は疲れたことでしょう。何と言っても、距離が遠いのですからねえ。私の方もあなたの感化なのか、心の眼を見据えて勉学に挑む覚悟のようなもの



が出来たとも言える。そんな心境でありますけれども、前途多難を予感しています。あなたから今回頂戴した本は大変有り難く読ませてもらっています。それから小此木先生が、『フロイト―その自我の軌跡』（NHKブックス）というご著書を送って下さいましたよ。あの方の気前の良さにはちょっと呆れます。ほいほいと心に思いついたことを実行する、その抵抗の無さにはとても感心させられます。それからその本の内容ですが、今朝届いたのをずうっと読んでいて、未だ読み終わっていないのですが、ひじょうにおもしろいものです。とても人間臭みのあるフロイト理解で私は興味を持ちました。やはりあの方はおそらく日本で将来お話相手になっていただける一人としてマークしておきたいお方でしょう。

あなたが去った後、気持ちが減入ってしま



うかかと思っていたのに、それがまるで全然なものには驚いています。やはりたまたま本出祐之先生が英国福祉行政の視察のためこちらにしばらく滞在なさっておいでで、ともかく話の出来る人の存在が身近にあることが大きな救いなのだと思います。あなたがロンドン滞在中、本出先生をもお招きしてご一緒にお食事したの、愉しかったわね。これからもこちらで本出先生の許に集まってくる人たちとの交わりに大いに興味を覚えることと思う。異業種間でも互いにアイディアを披露し、吟味し合う仲間を持つことの意義を強く思いますし。



久保先生なんて、私の話が面白いって、よくおっしゃるのよ。何か書くといいて。いい刺激を貰ったりあげたり・・。そんなことがとても嬉しい！

あなたともこの旅の間にいっぱい話が出来たわね。旅先での風景やら人々やら、それこそ‘一期一会’のいい思い出がいっぱいあるけど。撮った写真が現像されれば、改めて懐かしく思い出されるでしょうが、どちらかといえばあなたと話に夢中で周りの風景は薄ぼんやりしたままだわ。



お父さまやお母さまやらにもっとおみやげに持っていってもらうのがあったのじゃないかなって、その他にもあれこれ反省することがなくもないのですが、まあ此の度の旅行は全般的に大成功であったと思います。天候にも恵まれたしね。



あなたを見送ってからヴィクトリア駅に着いた頃に雨が降り始めまして、その後2、3日は曇り空のお天気で肌寒いぐらいなのです。日本は暑いでしょう。元気で頑張ってください。私たち個々の歴史が、何とか少しずつ恰好がついて来て、業績なり交友なりが多彩になってゆこうとしているのは嬉しい限りです。いずれ又。 チズより

.....



1975年9月1日

マコへ

イギリスへの旅から戻り、あなたの体が十分には回復していない状態で、わざわざ難しい内容の手紙くださって、恐縮しています。あなたは一見随分ケロケロと平気そうですが終わったような風でしたけど、やはり大したストレスだったのじゃないかと思うの。私がいたことで、カルチャーショックを経験する、或はそれを感知する余裕もなく、又それを乗り越えるなどという時間的余裕のない中のことでしたわけで、あなたのように真剣に物事やら人間を把握し、取り入れ咀嚼しようとする人間には大仕事なのじゃなかったかと、今にして思うのです。

或るドイツの精神科医が、日本への旅の帰りの飛行機の中で、自分のカラダが地球(世界)或は異質文化を巡り歩くということでの、或種の異常な感覚の喪失というか、幻覚みたいな体験を綴っていましたけれど。内的世界の次元が複雑化するにつれて、それらをうまく纏めあわせて一個の機能体としてうまく働けるようにすることは難しいものだと思う。かえって感じない人間ってのは、雑草のようにのさばりはびこってゆけるものなのかも知れない。私、時間的制約のある中で、どうしてもあなたにあれもこれもと詰め込む具合にしてしまっって…。決して今現在あそこで経験したことを総て分かろうと無理しないように。一つの体験を味わったその時の思いを分かるのに、人は時には何年も、或は一生を費やすかも知れないし。それはうまくすれば、その人間を豊かにするものであるでしょうから…。

ところで私が恐縮してかつ嬉しく思ったことは、あなたが私との会話を有益だと思ってく

ださったことで。実のところ私はこれ迄ジクジクと行き詰まりの感があって、あなたに一体3年間何を勉強してきたのかと問われるのにどう答えたのかと内心冷汗ものだったの。現在この前の手紙にも書いたと思いますが、何故か或種壁がぶち壊せたようなのよ。ほんの少しだけだね。メラニー・クラインの子どもの中にある阿修羅の如き世界の解明に、もう一つぜひとも別の視点を設ける必要を思い、やる気を出しているところです。それは母性という‘摩訶不思議’なるものの正体の解明なのです。

この英国では、統計によれば7千人の幼児が毎年殴られ蹴られ、或は火傷(親による)によって死んでいます。その他、4、5千人程が重傷とのことです。児童虐待は深刻な社会問題なのです。しかしその対策は、ひじょうに未だ徹底してない(その性質上、出来ない)状況にあるのです。私は、子どもをぶたずにいられない母親の‘狂気’を本当に哀れに思うのです。話は違いますが、現在墮胎を悪とみなす女性は殆ど皆無になってきてます。それも公的機関で無料化をめざして、大がかりな署名運動がおこなわれています。実は私も署名をした一人ですが。我が子を生かすも殺すも私の自由勝手ということになれば、昔死んだ(或は殺した)子どもへの罪意識のために、その供養のために切実に日本の親たちがお地蔵さまを求め、慰められたということはもう過去の妄想になってしまうのかしら…。日本の‘ママゴン’は、世界中至るところに頻出しているようです。梅原猛氏が同様のことを言っていましたよ。あの方の著作『地獄の思想』『仏像・心のかたち』、実に良かったです。それとの関連でもありますが、Dr.Laing(『引き裂かれた自己』 みすず書房)が日本で読まれて来ているようですね。どうやらあの方はクライン派

の流れを汲む人のようですが、私は自閉症と精神病者の理解では、やはりすぐれていると思う。子どもが1年未満における母親の深層心理の揺らぎに興味あるでしょ。さて、その解明にはどう切り込んでゆけるものやら。何かが見えてくるまで、まるで闇に眼が慣れてゆくのを待たねばならないみたいだ。あなたにお渡ししたペピの観察記録、あれがセミナーで発表した資料の総てです。他はメモ程度で、それらはサマリーの中で纏められています(要点のみが)。じゃあ、どうぞゆっくりと静養なさってね。 チズより

.....



1975年11月3日

マコへ

秋の暮れをどのように過ごしていますか。私の方、やっとこさ峠を越えつつあります。勉学の方は順調です。本出先生との夕食会の成果はひじょうなものと言えます。お蔭で私は飛躍的に成長しようとしています。

ところで送った本など、そちらに届きましたか?『The Competent Infant』という本、私も興味深く読んでいます(P. 20がいい!)。さて、パーソナル・アナリシスの件ですが、1年間の混乱期を経て、ようやく少しずつ創造的なものになりつつあるように思えます。それと同様なことが、本出先生との関係についても言えます。これ迄の‘いじけた殻’から自分がどうやら脱皮をしてゆくの感じてます。私、恐れなくなりました!

ところで、住所変更をお知らせしておきます。11月8日以降ですが、【タヴィ】の斡旋でようやく満足できる下宿先を見つけました。家主のMrs. ブルックは元ジャーナリストとか、知的な雰囲気のある楚々としたご婦人なの。裏庭付きの

一軒家の三階の一室に間借りさせていただくことになったというわけ。ほんとうにラッキーなのよ。【タヴィ】にも分析へも徒歩で通える距離です。

あなたの方、いろんなこと、幸せにしているのかと案じています。サッチャンの体の調子は如何がですか? 両親をどうか頼みます。いずれれ又、落ち着いてからね。 チズより

.....



1976年2月8日

マコへ

あなたの方からのたより、最近途絶えていますけれど、元気なのでしょうね。私の方のスケジュールもかなり殺人的ですけれども、あなたに比較すれば楽なはずですし、とにかく週2回土曜・日曜が連続で休めるのは何と云っても心身ともに助かるというわけです。

つい昨日なんて、午前中、【プレイ・グループ】で12~13人の5歳以下の幼少児の遊び相手に余念なく、それらの喚き声、泣き声、笑い声の渦にくるくる舞いなのでした。午後はと言えば、セント・ジョージ病院で6歳児の男の子とのセラピー、支離滅裂なファンタジーをばらまき散らす彼との50分のセッションを過ごし、次には10歳の男の子、日頃から両親から冷遇されている様子なのですが、つい先日父親に殴られたとかで(入り口のドアの鍵をなくしたということが理由とか)一時保護に預けられ、ここ2、3日のうちにその処遇が決まるという状況...。次には、父親が酒飲みで、まったくのアカンタレ、意気地無くも唯死にのめりこんでいっている状態といった、そんな親を持つ12歳の女の子で、ひじょうなる不安症状の待ち主...etc。そんなあんなに遭遇し、折々に翻弄されながらもセラピストとして

の視点を俄然培っているところで、実に鍛えられております。

先週、本出祐之先生が帰国なさいました。アメリカ向けて、2週間あちらで滞在の予定とのことでした。出発の前の晩、私が彼のフラットに訪ねて、お別れを述べて来ました。手料理のものを持参して、同じフラットに住んでいらっしゃるロンドン駐在の銀行員の方をお招きして、三人でかなりおもしろい討議を展開させたのでした。本出先生と約半年、時折お会いして話げできたことは、何と云っても有意義なことでした。日本へ帰れば、再びお会いする機会があるのやら無いのやら分かりませんね。この異国で必要な時に必要な人々の登場には実に不思議に思われる。私も様々な人との交わりが出来、ここ一年程の成長にはめざましいものがあったような思いでいます。(あなたが来ての夏以来のこと)考えも少しずつ自立の方向へ向かって進歩していると思っています。勿論多々直面する難題には、やはり指導してくれる人がいるし、依存しているのじゃなくとも、経験を分けて譲ってもらう意味で、そういう人々の存在は貴重なものと言えましょう。確かに師というものには、常にそのレベルに達しきれないような思いを抱いて恐れるのだけど、それはプロセスの一環なのであって、弟子は師を乗り越えようする、そこに人類の進歩なり進化なりが約束されるのだと思う。乗り越えることを、乗り越えられることを恐れてちゃ駄目だと思う、お互いに。まあ私も29の年を過ぎて、まことにしっかりと落ち着いてきましたよ。どんな人に対しても臆するということがなくなりました。これ迄の闘い(内面的な)の成果なのでしょう。

私のトレーニングのことだけど、アナリティク・ケース(週3~5回のセラピー)を【タヴィ】で持とうかどうか、今迷ってるところです。

ところで、朝日新聞で最近、「岡本太郎」が注目を浴びているのを知って、嬉しく思いました。彼が言ってるの、「一つの民族は、固有の暗号をもっている・・。それは見えない暗号でありながら、また生活的には、形となったり、色になって表現される。そのモチーフは、言葉では説明のしようがない。こうした無言の地点から、民族の文化芸術を理解すべきだ・・」って。私はすごく悩みます。この含蓄の多い言葉の背景にあるものを解ろうとして・・。

ではいずれ又。 チズより

.....



1976年6月20日

マコへ

先日お母さまのたよりで、ずうっと体の具合がすぐれず、あなたが週末に帰って来て面倒をみてあげていたことを知りました。お母さまはあなたのこと、見直していましたよ。優しいとあるって・・。更年期障害だとのことですが、どんなものなのでしょうね。私としては、何も出来ずにいるわけやし、だからいっそうのこと心配なのです。

八月に私が一時帰国する件については、あなたが随分お父さまを説得してくれたとのこと、お母さまから聞いています。ご尽力ありがとうございます。あなたは昔から長女の貫禄があるのよねえ。お陰で私はいつも次女の‘ぼんやりさん’の役回りをついついしてしまう気分になるのだけど。仕様が無いわね、こればかりは・・。

さて、昨日小此木先生と会談いたしまして、私のこちらでの研修の実態などお話したところです。私としては後一年(来年の七月の末迄)でここを去るべく、トレーニング・コースにおい

でも、それに備えて【タヴィ】の教官方に考えてもらっておりますし。病院のケースは現在6ケースで、もう直あと2ケース担当します。【タヴィ】でもトレーニング・ケースをいよいよ持つと思われます。違ったスーパーヴァイザーについてみることで、又違ったものの見方・考え方を学ぶわけですから、今後の展開にかなりの期待が募ります。

これ迄1年半、Mr.ジョン・ブレンナー（病院のスーパーヴァイザー）とはごくうまくやってきましたし、私の進歩に彼は至極満足してくださっています。私のセラピストとしての資質についての彼の評価は「exceptionally talented（ひときわ優れた、稀有な才能）」とかおっしゃってます。ジョンが私をご自慢に思ってくださいることが嬉しいということぐらいで、大して驚きはしませんけれど、ちょっぴり面映い感じです。

それだけに、今後日本での私の将来をジョンも【タヴィ】の教官方も心配してくださっているわけで、私もそこらへん慎重にと考えているのです。どこの精神科（病院）も、いずこにおいても心理学の人をあまり入れたくないという風潮は一般的にあるのですね。小此木先生はその点甘いというわけで、先頃総スカンをくったとか、嘆いておいででした。実際のところ、心理学の人の方がより深くじっくり構えて臨床をしているということも確かということですし、私七月末にアメリカからの帰途こちらに立ち寄られる鑑先生に会いますけど、どうも私の勘では、斉藤久美子先生を始め心理の人の方がよく理解してくださるように思えるわね。小此木先生としては、いろいろと未来の構想（小此木スクール etc）とか執筆とか出版の予定があまりで、それに私を加えてゆきたいおつもりらしいのですけど、私ははっきりしたお返事はしておりません。ともかく夏一時帰国し

た際、慶応病院の精神科の主立った人たちと会合を持つ手筈を決めました。どういうことになるやら・・・その一方で、斉藤先生に頼んで大阪・京都近辺の施設など挨拶回りし、現状視察をするつもりでいます。彼女から時折たよりがあつて、とってもしんどそうです。あれもこれもという周りからの期待やらおつかぶされる仕事の量に呻いてはるみたいよ。特に大学での連日連夜のミーティングの意味のないことにはうんざりしてはるの。話を聞けば聞くほど、私は大学へは近付かん方がいい。飽くまでも‘職人氣質’をつらぬいて、心理臨床一筋に携わってゆくわ。

実は、Dr. 北山とおっしゃる若手の精神科医にお目に掛かる機会があつたの。モズレイ病院に研修留学しておいでで、久保先生のお仲間というわけ。セラピー・ケースの話に比較文化の話やら、結構有意義な情報交換をしました。唯何でも日本でその昔シンガー & ソングライターだったとかで、芸能界では有名な方なんですって。臨床は無理でしょうねえと話したの。彼もそれは承知で、文化評論家のようなものにならずに将来なるらしいの。本人は、玉虫色だからって仰ってたけど・・・多才な小此木先生ですら慎重で、雑誌類（『生長の家』とか・・・）のコラムに寄稿するのを最近差し控えていると言っておいででした。やはり臨床活動には差し障りがあるとお考えのようで。なかなか難しいことです。世阿弥の《秘すれば花》 かどうかは定かではないけれども、世間的に言うところの‘有名になる’ということは一種‘危険’なのだという警戒する思いがどうも私にはあります。心理臨床家というプロフェッショナルとしての技そして名誉を重んじるとするなら、大衆寄りにはならないのがいいということかしら。いずれ又。 チズより

.....



1976年9月1日

マコへ

日本滞在中は、あなたには本当にいろいろとお世話になりました。有難う！お陰さまで、私も一仕事やり終えた気分です。安堵しています。えらく贅沢な日々を送らせてもらいました。今尚あれやこれやと思い出しては、嬉しさを反芻している具合です。私なんか此地でひどくかつかつの生活してるからかしら、皆が裕福そうに見えて、羨ましいというよりももうびっくりだったの。イギリス留学なんて全然恰好よくなんかない、ほんと‘根無し草’の悲哀をしみじみ感じさせられたのよ。

でもまあ、こちらに帰れば帰ったで、「郷に入っては郷に従え」の習い通り、格別不自由も不満足な思いもしていないのです。何と云うか、まあ腹を据えて、あと2年間でこっちで過ごすんだらうなあって気でいます。格別に嬉しいというわけでもなく、でも終わって見れば、一つ何かやり遂げたといったような充実感を持たないこともなかろうと思えるし。一生のうち、30やら31という年齢は何かとぶつかるやら迷うやらあるものらしいですし、どこにいたって同じでしょう。

いつぞや頂戴した『臨床事例研究』を少しずつ読んでます。昔、京大で四苦八苦していた頃の自分を思い出したりしてます。ともかくいい勉強になりました。ところで巻頭文に載っていた梅本教授の文章にはちょっと感激しました。彼、臨床の何たるか解っているじゃないの！意外でした。人をそう軽く解ったようなつもりで批判しちゃいかんものだと反省しました。あなたもどうぞ幅広く、師を、友を求めて前進してください。いずれ又。

チズより

.....



1976年10月15日

マコへ

先日はおたよりありがとう。そちらはしばらくいい秋晴れのお天気が続いたのに、時折ひどい颱風に吹きまかれるとやら親からのたよりで知らされてます。あなたも山の中の独り歩きも氣候の不順の折は気をつけるようにね。岩倉から大原の方へ抜ける道なんてあるのね。私はそのようなことを一度として好んで決行したこともないのが惜しまれる。どちらかというと静かな緑に囲まれたところで一人ポケットとしていたい。長く歩行するのはかないません。どうも呼吸器官が弱いのか、ちょっと一日歩き過ぎたり、重いものを持ったりで体を動かすと、後でひじょうに重苦しい気分になるのです。心身共に激しく酷使することがないように気遣わなきゃなんない。どうやらそうした私って生来的でどうしようもないものみたい。それだからか、ただゆっくりと、でも又着実に自分のペースで歩いてゆくしかないということになるわね。

先日トレーニング・コースの個人指導教官と話合って、あと2年間の最終過程をやり終えることに手筈を決めてきました。幾つかのセミナーに加えて、【タヴィストック】で3つの分析ケース（1ケース、週3～5回面接する）を担当することになります。各ケースには別々のスーパーヴァイザーが付きますし、いよいよ終盤の固めの時期です。これ迄充分に観察の経験もし、病院で週1回のセラピー・ケースも随分の数を持てるようになりましたし、全然不安なく、新しい段階に入ってゆけると思ってます。お母さまの体調は随分と回復していることだし、お父さまからはちゃんと今後のことで了解をいただけてますね。残るは、この飛躍の年を如何に生き抜くかです。

さて、ロンドンで今夏設立された【仏教会】に来週末、初めて出席する予定であります。いずれ仏教には関わりを持つことを願ってましたし、そこでの人々との出会いが興味深くあればいいかと思っています。それでちょっとお願い。

• • • • •



1976年10月25日

マコへ

相変わらず忙しいでしょうね。元気ですか。落ち葉が、この雨続きで、路上でビシャビシャになっているという具合です。そちらの気候は如何ですか。

私の仕事の方は順調です。と言っても何やかやとこういう仕事に携わっていると安堵しきっているということが出来ません。しかし日増しに自信がついて来て、落ち着いてきたとは言えます。成人のための夜間大学で社会文化人類学の講義を受けたり、フラワー・アレンジメントの教室に週1回出掛けたりしています。近頃そうした気分転回が絶対に不可欠な気持ちでしたからなの。結構愉しんでいます。

ところで今ピアジェの『Play, Dreams & Imitation in Childhood (La Formation du Symbol)』を読んでいるところですが、何とも言いようのない感動です。乳幼児の観察を経た後ですから、理解力もよくなっているのでしょうけど、ひじょうに画期的な業績と考えられます。昔日本訳で一度読んだ記憶があるのですが、昔からサイコセラピーで起こる現象が不思議だと、ずうっと思い続けてきたことが次第に解明されていく思いです。あなたの自閉症児についての論文も参考にさせていただきます。

ところで近くに住むシモヤマさんの奥さんが【タヴィ】のコースにしばらくいらして、それで知り合ったのだけど、2番目の子どもさん(男の子)が産まれました。彼女一人で病院へ救急車で行ったのよ。ご主人の留守の間のことで、私は上の女の子(1歳5ヶ月)を預かり、一日面倒を

見てやったのです。大サーヴィスをしましたせいか、彼女、だいぶ機嫌を取り戻して、私安心していたら、後からの報告を伺うに、翌日病院に訪れた折りに母親の側へ行きたがらないとか、理由もなくかなきり声をあげるなどのひどい様態を示し、その後も3、4日間(奥さんは3日目に家に帰ってきた...)ずうっと夜昼と泣きわめきが続き、赤ちゃんの授乳の際、哺乳ピンを奪おうと躍起になるなど、もう荒れに荒れたみたいなのです。子どもの‘感情生活’というものは恐ろしくも深刻なのだということを肝に銘じた次第です。そうした刻印というものは大人になっても尚息づいてるものだということなのです。厄介と言えば、厄介ですが、なかなか興味深いことです。

いずれ又。 チズより

.....



1976年11月2日

マコへ

ずうっとじめじめしたお天気続きなのですが、今日はカラッとした青空です。だいぶ寒くなりました。紅葉(と言っても、こちらは黄葉なのですが)の季節もそろそろ終わりです。あなたは山歩きで又々英気を養ったとのこと、結構でしたわね。谷川の水音に意識を消されて、自分の現在に過去が幾つも重なって、どれが一体自分なのか解らないような思いに浸るのが私は好きです。そうして想い出されるイメージに自分の歴史をみることもできるわけで、生きているということ、生きていたということはまあ結局そんなに悪くもなかった、そんな‘諦観’を抱きます。

気分的にはどうやら沈静化してるというか、嬉しくもおかしくもない心境とは言え、どうか順調に地歩を固めていっているという具合。

最近ピアジェの『Construction in Reality in Childhood』を読み始めました。私、この人好きやわあ。丁寧に子どもを見ることを教えてくれる人としては最高だと思う。

それから今学期から、ジョン・ボウルビイの講義に出ているのですが、彼、いい人なのよ。お年を召してらして、経験の重み(臨床プラスおそらく生活体験)があるというか、その融通性・弾力性のある人間味には、とてもこちらが感化されます。年をとることに希望を持った次第です。素直に驚き、感心した人ってのは【タヴィ】でこの方が初めてです。

ところで、先日お知らせした、こちらの友人宅で2番目のお子さんが産まれた話なんだけど、上の女の子がひどい泣きわめきの反応を示して大変だったんだけど。それが又なんと、2番目の子どもの出産の1週間後、ご主人が父親の危篤とかで急遽日本へ一時帰国なさったの。まだ意識のあるうちに話が出来たということですし、死なれてみて、会えなかったならば、どんなに後で嘆くことかと察せられるから行って良かったのでしょうけど、ロンドンに残された家族は大変なものでしたわけ。上の子がやっぱり帰ってきたパパを怖がって、お母さんの方へ逃げたんですって。話を聴くと、八月中に一時出血があって、それもご主人の留守の時、母親が緊急入院中の3日間、その女の子、フォスター・ホームに預けられていたんですって。今でもお母さんがちょっと横になると、ギャーギャーって喚くのよ。大人の方としては精一杯のことしているのですけれどね。どうしようもない、わけのわからないことが連続して起こるので、混乱している様子なのです。いろいろ考えさせられた次第です。それでも一日中、子どものお守りをすれば、とても読書に

専念するような余裕なんてありやしないの。将来自分が持つ家庭のことを考えると、さてさてどこまで夫やら子どもらに付き合わせさせて然るべきといえるか、どうしたものかなとしばし煩悶していたような次第です。

では、お母さまのこと、よろしく頼みます。それから、あなたの「症例」を読ませてもらいたけれど、患者さんの自我の持つ強さがぶつかりぶつかりの試練をくり抜けていってるという感じで、痛ましくもあり、かつ興味深いものでした。お互いに頑張ってまいりましょう。 チズより

.....



1977年4月11日

マコへ

おたよりありがとう。転職はやれやれでしたわね。理想的な環境に落ち着いて満足している様子が窺われて、とても結構です。今は緑がグングンと勢いついていることでしょう。日本の野山を歩いてみたいものです。あなたの方、この春には筍を思いきり食べたでしょうね。異国にいても、この時期になると筍を食べたいって猛烈に思うのよ。なかなか習慣として身についた感触の欠乏状態ってのは辛抱を要するものです。

ところで、先日ハングライダーのドキュメンタリー・フィルムがTVで報道されましたが、英国人で、何とまあ富士山から飛び降りたのよ。なかなか痛快なものらしいですね。そのうち女性でこれに挑戦する人も出てくるでしょう。

私の方、仕事は順調、独り立ちでやってゆける自信は1年半後には持てるでしょう。この頃、柳田民俗学やら芭蕉やら民俗的文化

遺産の吸収に俄然熱意を燃やし始めています。
本出祐之先生が七月初めにまた視察にロンドンにお越しです。私に何かお薦めの本があれば、彼に託けて下さい。よろしくね！

いずれ又。 チズより



1977年6月25日

マコへ

あなたから依頼のあった本、お届けします。
ところで、私がつい最近読んだ本でひどく面白い本があるのです。『Touching』という題目で、アメリカの文化人類学者の著書ですが、西洋文化の中で如何にごく人生の初期に必要なスキン・コンタクト(皮膚接触)が軽視されているか、或はスポイルするという名目で禁句となっているか等々、パーソナリティ論の中核を占めるものとして云々されているのです。私など、こっちに長年居て、どうも肌に合わぬ思いをずうっと抱かされていたから、こうした‘摘発’を大歓迎したいわけなのです。

私自身の赤ちゃんを抱っこしたり、世話するという経験の過程の中で、或は他の人の観察でも、感情分析するなら、母親が赤子との間で‘Touching’を持つとうにも持てないというようなことはどうしようもない事実としてあって、それも多くの場合ごく普通に起る気がしています。一般的な現象として、‘触れられることへの嫌悪’は、ポルノグラフィーに顕著なように、えらく肌を露出するとか、刺激を過剰に要求することの裏目であつたりしますし、感じられないことの嘆きは、もっと深刻に取り上げられるべきだと思うのです(この現代社会で)。自閉症児とその親たちについても、それが問われるかも知れません。

同封した絵葉書、ゴーギャンのこの絵、いいでしょ？ 構図といい、色彩といい、それに大概の彼の絵の中には無い‘動き’が、この絵には感じられます。とても気に入った一つです。どうかしら？

さて、ピアジェの著書は、遅々としてはありますが、この頃読みながら次第に理解を増してきています。すぐれていると思います。それでふと気づいたんだけど。ピアジェの観察の中で、何かというと、子どもが(驚きや発見やらの度に)キャキャキャって笑うでしょ。何であんなに嬉しいのかしらね。サッチャンとこの潤くんもそうだけど、子どもって一般的にごくストレスの少ない日常生活って、キャキャキャって笑いたくなることの連続なのかしら？ 自閉症児の空笑にしたって同じことです。要は、内からそうした幸福感につながるようなフィーリングが湧いてくるわけなのね。それが単なるイリュージョン(illusion)にしても…。メラニー・クラインの著作を読むと、そのキャキャキャの部分って「躁的防衛」で片付けられている。確かにディスルーション(disillusion/幻滅)ってのは、何であれ、ある程度のペイン(痛み)を伴うものであるわけだから、必死に防衛に努めるってことは解る。でも、‘健康な躁的防衛’というのもあるんじゃないかな。私などもそろそろ30歳の年を迎えるにしても、まだ童心というか、どうも‘キャキャキャの部分’があるから、救われているとも言えるわね。苦労が足らんと言われそうだけど…。

ところで、お母さまの件、どうなっているのか案じています。‘攻撃性’を外へ向けるように、大いに後押しをしてやって下さい。風邪を引かぬように(乾布まさつがいいよ！)。

いずれ又。 チズより



1977年8月30日

マコへ

バリ島からのおたよりありがとう。お母さまのお供で随分とご苦労された様子が窺われましたが、日本に戻ってあなたが体の調子を壊しているのじゃないかと案じております。

私の方は、コーンウォールの南の海岸地方で海の波しぶきを眺めてきました。絵描きやら彫刻家やらが群がり集って栄えた漁師町があって、あちこちぶらぶらとアート・ギャラリーを覗いてみたり、なかなか刺激を受けました。自分の関心事であるプレイやら夢やらの分析との関連で、「モダン・アート」の流れに強く興味を覚え始めています。私たちが創り出す象徴形態は、キリスト教の宗教芸術やら、あなたがインドネシアの寺院で見たものとも随分違ったものになってきているのだけど、いずれにしても、人間の心の内部から湧き出る表現への意欲ってのは絶えることのないものですね。生きることの味わいとも言べきものをそろそろ感じてきています。

いずれ又。 チズより



1977年11月17日

マコへ

随分ご無沙汰しました。何かと気ぜわしい状態でいたもので、土曜・日曜の休日も、自分の身の回りのことやらで精一杯で、落ち着いてあなた宛に所感を綴るといったような余裕を持たず、それでもあなたのことどうしているのかと気にはしておりました。唯おそらくはあなた自身の成長を待ってというか、あなたに実力が付くに

つれ、職場のグループの中に身を置きながらも、あなた固有のフィールド[土俵]で孤軍奮闘してゆく外ないのかなと考えていたようなことです。でもそのしんどさは並大抵のことじゃなかろうとも察しています。

私の方は、つい最近まで、トレーニングの枠組に嵌ることの抵抗があり、どうも時折あつちにぶつかりこちにぶつかりともがいておりましたけれども、その奮闘の甲斐あって、やっと安定した状態になりつつあります。その枠組にしても安全保障やら防壁という意味を私の中で持ちつつあるからして、以前に比べれば、どんなにか気が楽になってきているか知れません。それでもセラピイの仕事の凄まじさはいよいよ極まれりといった具合で、啞然とするやら、私自身の中に起こる‘怯え’などであたふたとなりながらも、日々懸命に子どもと格闘しております。

ただ悩むことは、日本の臨床論文を読んで整理解明できたとしても、それを英語でしか語れないわけです。英語というコトバを、代数を解くような感覚で使って、それで論理の骨格やら筋立ては説明できるとして、うまく描写できないわけ。それでまずは、乳児観察の経験を(乳児心理学を)平明な日本語で語ることに努力しようと努めています。そうしてみると、日本語の持つ情感の故か、現象各々のもつ内容をより切迫した意味合いに描写できるように感じられます。将来の私の課題となりましょう。

日本の秋は美しかったようですね。いつもどんよりとした天候のロンドンですが、つい近頃の光陽の冴え方は驚くほどで、気づくと全然注意も惹かなかったような木々の葉が呆れるほど多彩に光を放っているのよ。日本の太陽の光の恵みにいっそう憧れの想いを抱いたのです。

私の方、クリスマス頃にパリに行って、念願の美術館巡りをしようと決心しています。やっとそういう余裕が気持ちの上で出来たということです。ではくれぐれもお大事に。寒くなりますから。いずれ又。

チズより



1978年2月22日

マコへ

こちらは、例年になく厳寒の初春を迎えています。それでも日差しは随分明るくなったと言えますけど。そちらは如何がですか？ 裏山の散策も冬は冬なりに趣きのあるものでしょうし、竹林など、雪にこんもりと覆われた様子など、特に見てみたいと思う日本の風景の一つです。

何と云っても、私たちは今が最も仕事に打ち込める時期でもあります。30歳を過ぎて、仕事の上での自信も次第に出来かかってきているでしょうし、まだまだ若いという気持ちもあるし、交友関係もまだ型に嵌まらず、自由な感覚を保ってゆけるというものですしね。例の京都のノリコさん、マンションの一室を購入し、独居生活を構えたのですってね。友人たちに週末は開放するなんて、あの人なりの生活設計を着実に実現していつている様子が窺われ、何やら新しい時代を感じます。一昔前の、私たちのお母さまの若かりし頃などとはかなりの隔たりのある生活スタイルを選択し、実現していつているということですね。頼もしい限りです。

私自身も今ここにこうして収まっているのが不思議という思いを時折抱きます。何だかんだと不満やらが噴出し、結構こちらでもごねることがなかったわけでもないの。それで今全面的に

幸せだということでもないけど、まだここに居るわけですから、これも一つの根性というか、やっぱりここ迄来たからにはやり遂げてみせるっていう‘負けじ魂’が働いているのかな、私の中で。日本に帰れば帰るで大変なことになるような切迫感がなくもないけど、私はもう頑張るという無理を捨てる。仕事の上で、自分が、相手がどう動いているのか見えてきたし、自分の仕事の理解が深まる程に面白いことが解ってきたわけで。そういう‘面白いと覚える意識’こそ、自分のなかに大事に育ててゆかなきゃと思ってます。そこから思想は芽生えるのだから・・・。

ご近所に3軒ほど日本人の家族がお住まいで、時折お訪ねすることがあるんだけど。小さいお子さんがいらして、特に赤子の時から観察している子どもって、面白いと言えば、あんなに面白いものはないとも言えます。パーソナリティが徐々に形成されてゆく過程って、スローモーションにかけて見るような面白さです。その折々に気づかなくとも、後で資料を集めてみたりすると歴然として‘筋’が見えてくるわけ。そういう驚きって、セラピイで子どもを1年以上みていると、その子なりの自己表現のあり方の‘独自性・固有性’みたいなものが顕在化してくるのと似ています。生きてるって、心って凄いい営みをするものだわねえ。心底たまげる！

私は昔から、組織の中には嵌まらないポーズをとることがよくあったけど。それがこうした異国に居ると尚更のことで、周囲のスッタモンダに無頓着でいられるし、それはある意味で自分の存在を曖昧にしていることでもあるけど、かつトラブルの渦中に入らずに避けられているとも言えます。日本ではどういうことになるのか、問題です。ただ私自身の経験から得た自分の考えとか

は次第に明瞭になっていく傾向にあるし、日本に帰国してからの成長をもうんと考えなきゃならないわね。ともかく将来いい仕事がしたいです。

両親共、元気でいてくれることはひょうに心強いです。あとしばらく私の留守は続きますが、どうぞ大事にやってくださるよう、あなたにお頼みしますね。

では又。

チズより



1978年7月30日

マコへ

あなたの手紙、久し振りです。ありがとう。私の方、学期を終えて、今はただ八月からの夏季休暇を待つばかりです。あなたの言、＜これ迄よく独りで頑張った＞ということだけ。私はただ一步一步足元を固めてきただけで、それ程感激しているわけでもないの。でも言われてみて、そんなものかと思ったのです。振り返ってみれば、さすがえらくしんどいトンネルをぐり抜けてきたような、今にして気楽な思いになれているのにはほんとに安堵しているのです。臨床経験とスーパーヴィジョンとパーソナル・アナリシスが、まあ程良く円滑に機能してき始めたと言えます。

私たちの観察しているのは、培養器(セラピーという場)の中で「精神」という不可思議なものがどう育ってゆくかというようなものだから、つくづくその過程が視れるようになるのには年月をかけた鍛錬が要る。そうした感慨は深まる一方です。顕微鏡の操作にも似て、どう見るかのイロハをここ5年ほどの経験から学んだと言えます。日本で、ここで会得したセラピーという観察の道具がどう活かされて、果たして何がどう観察されるか興味深いことです。但し、実際には観察す

るということ以上の意味を持つのがセラピーです。その醍醐味をズバリ言えば、「セラピー過程」というのは、胎児の成長に似ているからして、それをみごもった者としてのセラピストの役割というものは揺るぎなくも積極的に胎児(クライアント)に働きかけ、かつまた働きかけられるという切羽詰ったものを感じさせられます。

この頃よく思うに、妊娠した母体の‘つわり’のこと、かつ又流産というものの実態(生理的な)。それが人間の場合は、誕生後(つまり臍の緒が切れて尚)母親との関係において、この切羽詰った依存関係を続けてゆくようです。ある高名な精神分析家が、＜胎児においても不快なフィーリングを排出しようとする動きがあるように考える(それは決して意識されてないだろうけど・・・)＞と、彼の精神分析の経験から推測された感慨を披露してらしたけれど。子どもを生み、育てるということは、生理的にも心理的にも当然‘つわり’は付きものでしょう。それを避けて通りたいというのは、母体が(生理的にも心理的にも)‘痛み’に耐える能力の欠如していることを示してはいないかしら？

考えてみれば、私の抱えてるクライエントの問題の起源は、そこに尽きるように思われます。皆一種の「自家中毒症状」とも言えるわけですから。不快なフィーリング etc が排出される術もなく滞り、詰まっているというような具合に。あなたの方の観察も同じかしら？ そう言えば、傾向として最近の母親たち、実際に手や顔やふところや膝を子どもに接し与えるということが次第に希薄になっていない？ 抱っこやらおんぶの回数やら・・・それは此国の母親については勿論なのだけど、私のこちらで接する日本人の母親たちについても同様に観察される。そう言えば、

いつぞやトモエさんとこのお母さまが日本からわざわざお越しで滞在なさった折のこと、抱いた孫娘を膝から下ろそうとしないのを見たわ。床の上の絨毯がどうしても感覚的に違和感があり、そこに孫娘を寝かすことに抵抗を覚えたということだったの。当然自分の膝を与えることに固執したわけ。すごく分かる気がしたのよ。普段、赤子を床の上にそのまま寝かせるなんてこちらでは誰でもが平気でしてる。赤子の身になってみれば、それがどんなものかわね。さすが年輩の日本女性の繊細なる感性だわ。内心密かに驚いたの。私たち次の世代の日本女性は、無感覚・無頓着といえいいか、心的な意味で赤子との‘臍の緒’は当然切れてることになるわね。

この頃、つくづく素朴な経験から思うに、人間というのはよっぽど毒気を孕むものだね。そしてそれがうまく整理され浄化されるような‘浄化装置’（母親の胎内、後には与えられた心の状態）に恵まれなければ、精神[心]の発達を決して促進されることはないと考えられるわね。それにしても心を与える者としての母親の感性がどんどん鈍磨していつてることが怖い。この頃私は、子どもだけでなく、成人対象のセラピー・精神分析をも視野に入れて、自分の将来を考えようとしています。益々解ろう・解りたいの意欲に燃えています。つくづくこの頃思うに、我が両親は誠に有り難いわね。まあ、いろんなひどい例を見るものだから。有り難い親を持ったことの恩に報いるためにも近々お母さまが単独ではるばるここロンドンに訪ねてきてくださる折には、出来るだけのことをして歓待し、私も共に楽しみたいものと張り切って、あれこれプランを練っているところです。あなたの論文も、どうぞいづれ送ってくださいね。お元気で。 チズより

.....



1978年9月10日

マコへ

日本の夏は大変な猛暑だった由、伝え聞いています。あなたの方、バテずにいましたか？あなた、香港に行ってたんですってね。結構でしたわねえ。

私は今、角川文庫から出ている『日本文化の起源』（岩田慶治著）を読み始めています。なにやら自分と‘同種’であるって感じを抱くのは、如何いものですかしらね？自分の見え方にいろんなものが繋がってゆく、そんな拡がりの感触がとても嬉しいです。

仕事の方は至って快調です。自立の時期です。だんだん自分がものになってゆく手応えて、いいものです。やっとここ迄来たなああって、感慨深い思いをしています。幸いにいいケースに恵まれています。いいケースって欲しいものですね。母親も親として育つためには（自信を持つためには・・・）いい子どもが欲しいと思うに似ているかしら。

ところで、先日思いがけず久保紘章先生がひょっこりお見えでしたよ。彼から、日本の学生たちがグングン‘幼稚化’しているって話を聞きました。又それとは別ですが、或る他の大学の先生から伺ったんだけど、この頃の学生は、昔かつて自分たちの世代がそうだったような、禅仏教とかギリシャ哲学とか、そうした思索への傾倒ぶりとは無縁だって。その代わりというか、熱烈な信仰グループに入ること、原理運動とか神霊教とか。それで現代の日本はまさに宗教合戦の絵図そのままなんですって。‘迷える子羊

たち’ってことなのかしら？！つまりは、自分の頭で思い煩うことをもはやしないということね。おそらく究極には‘苦悩する能力’が問われるわけだけど、「個の自立」などというのは、観念的にもだけど、実質的にもまだまだ日本においては希求されてなぞいないということかしら、一般的に言って…。これって、深刻に憂慮すべきことじゃありません？！「精神分析」が日本へ導入されるに当たって、この日本の状況はまずいと思った次第。下手すれば、私なんてまるで用のないものにされるかなって、俄然気掛かりを覚えたのよ。

実は先日、ロンドンの或る商工会議所のホールを借りて《日本の民芸展》が催され、出掛けてきました。展示されて並べられてあるものは、まあ言うならば、趣味のグループの人たちが作ったような、人形こけし、ろうけつ染めの刺繍、人工花などでしたが。あんなショックなことなかったよ。‘古びた伝統’というものの頑迷さがムンムンしているの。つまり一人ひとりの制作者の個性とか創造性のかけらもないの。例えば、十二単衣とか鯉のぼりとか、藤娘とか、図案はごくありふれた既存のものばかり…。盆栽やイケバナやら、生命ある‘物の哀れ’を基調とするものが全て人工の決して朽ちることも消えることもない(育ちもしない)もので型がつくってあってという具合だったの。文化的なお粗末さやら旧弊さには同国人として恥じ入るというより、むしろ私はもっと生理的な忌避感を覚えた。ギャーと悲鳴をあげたくなるような…。窒息しそうで、その場から即刻逃げ出したいような…。なんとも形容し難い窮屈さで、その圧迫感は日本という過去に身も心もがんじがらめにされたみたいな瞬間でした。もうほんとにクワバラクワバラといった感じ。それが旧態依然とした日本だとして、そこから未来の日本はどう脱皮するのかしら？

実に冷や汗が流れたよ。そうは言っても、実際にはその会場で、日本からわざわざお越しの、善意溢れるご婦人たちが実演されていた「手毬づくり」を、イギリスの子どもたちに手ほどきするのに、私が行き掛かり上、通訳して差し上げたわけだけど。子どもたちも珍しがつて嬉しそうでしたし、結構熱心に取り組んでたわよ。私も国際親善のお役に立ったというわけなんだけど…。

さて、ところで、お母さまは益々元気盛んの由。とても結構です。先日ロンドンに来てくれた折もピンピンしていたとはいえ、お母さまのからだを見ると、膝やら腰やらの痛みを抱えてるわけで。肢体不自由児療育施設で看護婦として働いた長年の肉体の酷使の刻印をそこに見るようで、私は一瞬、ああこの身体(からだ)から自分は生まれてきたのかと愕然としましたよ。痛々しくてね。私の周り、更年期障碍のあらゆる兆候を持っているご婦人たちが多いのです。私たちが老いる頃にはお母さまを超えて、身体的にも精神的にもうまく年老いるだけの器量を今から養ってゆきたいものと思ったのです。私たちは、これからの人生だよ！

いずれ又。 チズより

.....



1978年10月18日

マコへ

最近目にして、ひじょうに面白く思った論文を2つ送ります。「A Special Technique of Psychotherapy with an Autistic Child」の方は、あなたの経験から言っても共感できることが多く、かつ示唆に富むものと信じます。着眼している点がいいと思われる。(何と20年以上も昔の論文なのよ！)

もう一つの論文、「Early Childhood Autism: An Ethological Approach」の方だけど、とにかく動物観察の冴えた眼で自閉症児を見たところのユニーク性を高く評価したいわね。しかしまず第一に批判されるべき点は、人間のもつ（出生以来の）イマジネーション能力（ファンタジー）を無視している点です。何故或る刺激を恐れるのか、何故それが無いかの如く無視するのか、何故或るものに固執するのか等々、シンボル（凝縮された情緒経験の体系）の意味を理解せずして、人間の正常も異常もアクセスできるものではないと思うから。

あなたの下さった自閉症児の行動記録にしても、外界のものおよび人を取り入れて造りあげた想像内界におけるさまざまな混乱が指摘されてたけど、実に面白かった！つまりは、どうやら Love Object である母親に対する愛憎の激しさ、それに伴う罪障感などのさまざまなファンタジーが未整理のままであるとしか言いようがない。あなたの指摘した自閉症児の身体の強度の緊張やら均衡感の欠如などからしても、やはりいわゆる auto-erotism の段階と呼ばれる、ごく出産からの初期にそれらの源はあるように思われる。指舐め、男の子なら特にペニスをいじるとか、マスターベーションなど、そうした身体自己刺激運動の有無を調べてみるのはどうかしら。Biochemical な実験とか、Neurological の方面からの自閉症児の病理解明がなされているけど、身体生理と心理（想像世界）とは交叉するものであるからして、‘異常’が発見されたとしても、それが原因なのか結果なのかは判然としないと思うのです。ともかくもその表出するエモーション〔情動〕の詳細をみれば、それが何と1、2歳児のわけの解らぬカンシャクとか一時的ヒステリーとか、いわゆる親の言うところの‘難しさ’に如何に類似するか、驚くわけです。

それから自閉症児とか精神病児にしても、その表れ方がひじょうに千差万別で、例えば、私のスーパーヴァイザーの Dr.メルツァーなどは、＜自閉症児の運動能力は抜群で、ひじょうに優美だ＞って言ったり…。一見して親が情緒的に問題があるとか、乳児期にマザリングが不十分であったとか、原因として推察されるものは出てくるでしょうけれど。確かに、どんなに一見母親として申し分ない人であっても、子どもの幼少時において、ディプレッションとか何か心理的な危機・動揺があったか否かは追及してみる価値があると思う。私は特に母親の中に起こる、育児を通して起こる彼女自身の‘幼児願望’が子どもとの関係の中でどう処理されるものなのかという研究テーマがありますけど。あなたの接する母親たちも自分自身の過去の生い立ちを時折あなたに話す機会があるかと思います。マザリングという点で充分であったか、構ってもらえなかったとか、自分の母親に対して恨めしい気持ちが残っていないかどうか等、確かめてみるのはおそらく興味深いわね。でも、おそらく罪意識を掘り起こされるようで、そのように客観視されることを恐れ、嫌うでしょうけど…。それから別の観点では、本出先生が一つ、とても面白いことを言っていましたけど（実は彼は秋田犬の鑑定家みたいなね！）。犬のお産にしても千差万別で、仔犬（お腹の中にいる）の方から押し出るような勢いを持っていたり、全然その意思のないのやら（従って難産になる・・・）があったりなんですって。人間の赤子について言うならば、出産直後にすぐにも目をつぶったままで（！）、口をあけて母親の乳首を求めて、すぐさまかぶりつき吸うのがいたり、一週間以上もすったもんだで激励されて、それでも吸い付きの足りないのがいたり…。ニーズ（生存を含めての・・・）が身体的レベルなり情緒的レベルなり極度に複雑化している人間の

場合は、‘個性差’が重んじられるのは当然で、
‘育てやすい子’と‘育てにくい子’とがいるのは
至極もつともなことなのだという観点です。

問題発生は、常に、母親と子どもの相互
関連性(深層心理・そのファアンタジー、或はイ
メージの交換)に焦点が当てられるべきで、母
親が全ての問題に責任を(もしくは咎めを)負わ
せられるのは片手落ちだということを我々専門
家も一つ‘分別’として持つ必要があるのじゃな
いかと思う。つまりは、これ迄にも、或る一部の
精神分析家たちが残酷にも、「問題の子どもは、
問題の母親がつくる」といった仮説にこだわり過
ぎてきたものだから、必要以上に母親が罪悪感
に縛られて萎縮し、自分の子どもから離れてし
まうような結果を生むところの「ダメな親、或は子
どもをダメにしちゃう親」という自己イメージを抱
かざるを得なかったとしたならば、それは実に不
幸なことだからです。

私は、子どもも母親との間に起こるさまざ
まな愛憎の葛藤から‘卒業’できるよう助けられ
るべきだと思うし、母親にとっても、そうした子ども
の難しさを難しさとして受けて立つ‘覚悟’なりを
自ら引き受けられるように、子どもの取り扱い方
なりをも会得すべく専門的な援助・サポートが
ぜひとも求められるべきものと思う。

子どもの空想 Infantile Phantasy の発
掘およびその内容の解明詳細は、メラニー・クラ
イン以降、頓に発展している模様です。Dr. メ
ルツァーの自閉症研究グループの手で纏められ
た『Exploration in Autism』という本をいつか近々
手に入れたならば送ります。とにかくいろんな人
がいろんなことを言っているのを幅広くキャッチし
て、自分の臨床場面に活かすように、今後とも
お互いに協力してゆきたいと思ってます。頑張っ
てまいりましょう。いずれ又。 チズより



1979年1月1日

マコへ

新年あけましておめでとう。いいお正月休
暇をお過ごしでしたか？こちらロンドンでは15年
振りという大変な豪雪で、街並みは猛烈に冷え
込んでいます。列車不通の為、予定してあった
Dr. カーベル宅でのお泊りも急遽取り止めて、
自分の部屋でガス・ストーヴの傍らでテレビの
「お正月番組」を観たり、のんびり過ごしてます。
日本の古典ものなどの書物を、先日来の【タヴ
イストック】に提出した「資格論文」の疲れの反
動のせいか、頻りに読み耽っております。

今日1月1日の朝、大変おめでたい夢
を見たせいでとてもご機嫌です。それに‘付録’
ですけど、あなたが結婚の取り決めするとかの夢
もお節介なことに見ちゃいましたよ。やはり家庭
はいいわ。【タヴィストック】との繋がりでも、
教官のどなたもごく真っ当にご自分のご家族を
大事にしていらっしゃる。彼女らが優秀なのは間
違いないとして、その彼女らの値打ちを知り抜い
てバックアップしておいでの方君たちの存在が大
きい。そこにやはり成熟した夫婦のかたちを見る。
さて、日本はこれからどうなるかな？女性の自
立を謳うフェミニズムもいいけど、女性を支える
男性たちの男としての成熟度に今後大いに期
待したいわね。女が男を頼らないなんて嘘だし、
やはり男は頼られてこそ男だと私などは思うの。
新しい夫婦のかたちを夢見ている。

いよいよついに待ちに待った帰国を控えて
の1979年の幕開けです。これ迄本当にあなた
にはお世話になりました。今年もどうぞ宜しくね。
どうか幸せな一年でありますように。 チズより